

(6) 昆虫類

レッドリストに掲載された各昆虫類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は原則として以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、一部の種を除き絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」については、略称として「種の保存法」と表記することとした。

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目の範囲、名称、配列については、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境省編,1995）に準拠した。

目内の科の範囲、名称、配列は、目ごとに以下の文献を基に、新しい知見を加え整理した。なお、チョウ目については、チョウ類とガ類に区分し、チョウ類・ガ類の順に配列した。

- ・環境省編, 1995. 日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅱ）. 財団法人自然環境研究センター.（トンボ目、カメムシ目の一部、コウチュウ目、ハエ目、チョウ目・チョウ類）
- ・朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店.（ゴキブリ目）
- ・岡田正哉, 2001. カマキリのすべて. トンボ出版.（カマキリ目）
- ・日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会.（バッタ目）
- ・岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版.（ナナフシ目）
- ・川合禎次・谷田一三 共編, 2005. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索. 東海大学出版会.（カメムシ目の一部、トビケラ目）
- ・寺山守, 2004. 日本産有剣膜翅類目録. 日本蟻類研究会紀要, 2, 123pp.（ハチ目）
- ・井上寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.（チョウ目ガ類）

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「昆虫類レッドリスト」（環境省,2007）の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として目ごとに【分類群名等】の項に示した文献を基に、新しい知見を加え整理した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。また、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、県内分布図については以下のとおりとした。

・トンボ目

愛知県内の各市町村（平成の大合併前の旧市町村）を単位とし、対象種の現状の生息状況の本調査結果及び過去のデータに基づき推定し、それぞれ「現存の可能性が非常に高い産地」、「現存の可能性のある産地」、「絶滅の可能性が高い産地」に分類・表示した。

・トンボ目以外

本調査及び平成 9 年度から平成 13 年度にかけての「レッドデータブックあいち 2002 動物編」作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける 5 倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても 1 点として表示した。

【生息地の環境 / 生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用または記録として使用した文献を、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【昆虫類 執筆者】

・トンボ目

吉田雅澄 安藤 尚 高崎保郎

・ゴキブリ目、カマキリ目、バッタ目、ナナフシ目

岡田正哉

・カメムシ目

矢崎充彦 浅岡孝知

・コウチュウ目

長谷川道明 大平仁夫 蟹江 昇 戸田尚希 伊澤和義 山崎隆弘

・ハチ目、ハエ目

間野隆裕

・トビケラ目

西本浩之

・チョウ目チョウ類

高橋匡司 高橋 昭

・チョウ目ガ類

間野隆裕 西原かよ子

【昆虫類 調査協力者】

次の方々に現地調査、標本・写真提供、資料参照等で協力していただいた。

名古屋昆虫同好会 三河昆虫研究会 三河生物同好会

日本昆虫学会東海支部 日本鱗翅学会東海支部 豊田市矢作川研究所

・トンボ目

鵜殿清文 大野 徹 小早川勝教 清水典之 成田茂生

・ゴキブリ目、カマキリ目、バッタ目、ナナフシ目

竹田恭子 水野利彦

・カメムシ目

石田和男 堀 義宏

・コウチュウ目

佐藤正孝 (故人)

・トビケラ目

西本ふたば

・チョウ目チョウ類

浅野 隆 石木栄治 伊奈 紘 魚住泰弘 大鐘裕道 北岡明彦 白井和伸

高井則幸 田中 蕃 (故人) 水谷孝夫 山田昌幸

・チョウ目ガ類

乙部 宏 原田敏彦

(敬称略)

トゲナベブタムシ *Aphelocheirus nawae* Nawa

【選定理由】

全国的にも近年の確実な産地はごくわずかで、本県では 1940 年代前後の古い記録があるだけで、その後正式には記録されていない。

【形態】

体長は 9～10mm。頭部、前胸背側縁は黄褐色を呈し、腹部背面は暗褐色の地色に側縁の黄褐色斑が目立つ。前胸背と腹節の側縁は後方に顕著に突出する。通常は短翅型であるが、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西尾市八ツ面、春日井市勝川橋付近（庄内川）、名古屋市昭和区石川橋付近（山崎川）の記録があり、山崎川で採集された標本だけが豊橋市自然史博物館に現存する。

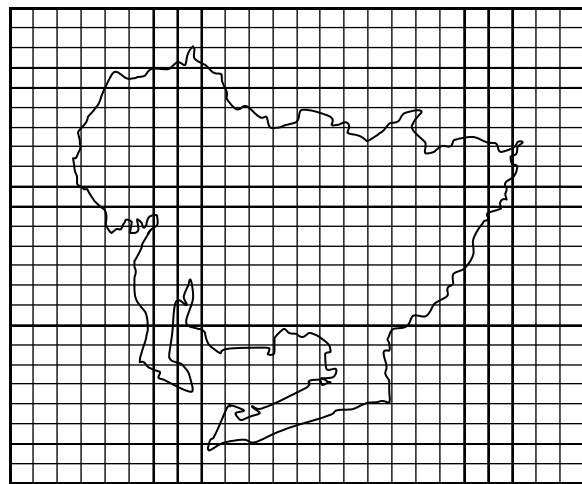
【国内の分布】

本州（東海以西）、九州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、カザフスタン、北朝鮮、韓国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部から丘陵地の河川で、底質が砂や細かい礫の早瀬に生息する。他県の生息地ではカワニナが多産し、淡水二枚貝やタナゴ類も豊富な環境である。カワゲラやトビケラの幼虫など他の水生昆虫を捕食吸汁する。プラストロン呼吸により、終生水中で生活する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては名古屋市内の山崎川でも多数生息していたとされるが、50 年以上確実な記録がない（長谷川, 2006）。護岸工事や生活排水の流入により水質が悪化したことが主因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い平野部の河川をそのまま保全することにあると考えられる。

【特記事項】

岐阜県の長良川近傍がタイプ産地である（名和, 1905）。隣接する本県は学術的にも重要な位置にあり、再発見が望まれる。

【引用文献】

長谷川道明, 2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナベブタムシの標本について. 豊橋市博研報, (16): 55-57.
名和 靖, 1905. 珍奇なる鍋蓋蟲に就て. 昆虫世界, 89: 4-7.

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi* Wewalka

【選定理由】

愛知県では 1950 年代には採集されていたが、1960 年代以降どうしたこともまったく姿を消してしまった。全国的にも非常に少なく、近年本州で採集された記録がない。

【形態】

体長 12~14mm。体は長めの卵形で背面に光沢がある。背面はほぼ黒色で、頭部前半、前胸背面側、上翅両側の 2 縦条は黄褐色。体下面と肢は赤褐色。上翅の縦条は、外縁に沿っているがその内側にある 1 条は中央やや後方で癒合する。



名古屋市守山区吉根, 1959 年, 森部一雄 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市港区土古、名古屋市守山区、瀬戸市市定光寺、安城市での記録が残されており、かつては平野部を中心に広く分布していたことが推測される。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州、トカラ列島の中之島。

【世界の分布】

台湾、中国、フィリピン、東南アジア。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部から丘陵地の池や水田に生息していた。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本県での生息情報は、すべて 1960 年以前のものである。本県を含め、本州からの近年の生息情報はまったくない。減少、絶滅の要因としては、平野部に偏って分布する種であったことから、宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布による影響を強く受けたことが考えられるが、詳細は不明の部分が多い。

【保全上の留意点】

現在同種とされる種が東南アジアに広く分布しているが、遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。現在ある自然状況に近い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【特記事項】

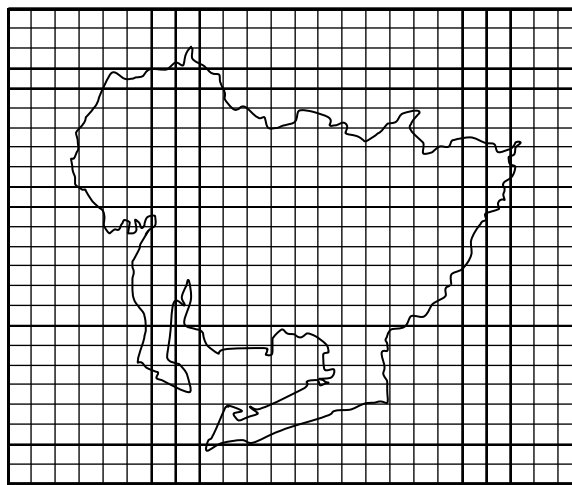
古い記録では、本種の学名は *Hydaticus vittatus* (Fabricius) となっているが、表記種名に変更された。現在ではオキナワスジゲンゴロウに *H. vittatus* の学名が当てられている。

【関連文献】

Satō, M., 1961. *Hydaticus vittatus* (Fabricius) and its allied species (Coleoptera, Dytiscidae). Trans. Shikoku ent. Soc., 7(1/2): 54-64.

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

県内分布図



マダラシマゲンゴロウ *Hydaticus thermonectoides* Sharp

【選定理由】

生息地である貧栄養的な止水域という条件のある池が極端に少なくなり、生息域が限定されている。愛知県では2例の採集記録が知られるが、いずれも1960年代以前のもので、既知産地では生息環境が失われ、その後他地域からも含めて生息情報はない。隣接する三重県内では比較的生息地が多かったが、1990年代以降減少が著しく、安定した生息地は失われている。

【形態】

体長9～10mm。体は卵形。頭部は淡黄褐色で微細点刻を有する。前胸背は後縁が暗色であるが、全体淡黄褐色。上翅は淡黄褐色で小黑点を散布するが、両側、基部、翅端付近に黒点は少なく紋様状となる。体下面は赤褐色。肢は黄褐色で後肢はやや暗色。

【分布の概要】

【県内の分布】

美浜町のため池（1962～1964採集）、名古屋市守山区志段味（1959年採集）の記録が残っているのみ。

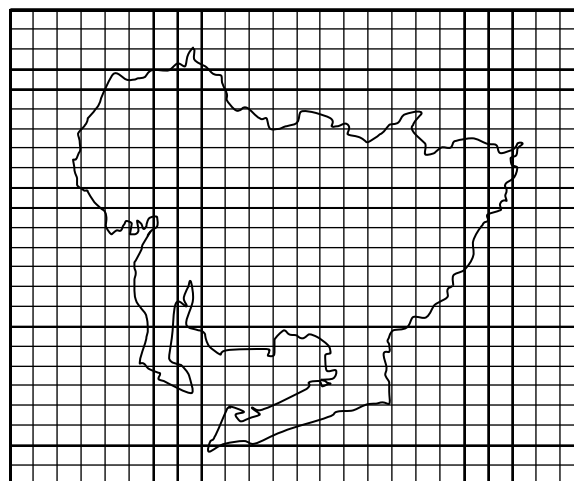
【国内の分布】

本州（長野県を基準産地として記載された種であるが、その後は愛知県と近畿地方に限られる）。

【世界の分布】

中国、朝鮮。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

水がきれいでも冷たい貧栄養的な止水域で、ジュンサイの生育するような小さい池に生息している。生態については何も判っていない。かつて多産した三重県伊賀市では丘陵地にある小規模で浅い池や棚田の最上部にある水域に生息地があった。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

これまでの記録のある美浜町のため池は、農業用水のために使用されていて存在はしているが、周辺開発の影響が大きく現在の生息は確認できていない。また、名古屋市守山区についてもほぼ同様。宅地開発、水田の圃場整備等による改変による生息地の消失に加え、農薬散布、外来種アメリカザリガニによる影響が考えられる。

【保全上の留意点】

貧栄養的な止水域を保全し、三重県などに残存している個体群の回復、拡大による自然復元を待つ以外ない。そのためにも、アメリカザリガニ、ブルーギル、オオクチバスといった侵略的外来種の根絶が必要である。

【関連文献】

佐藤正孝, 1971. 知多半島の水生甲虫類. 日本昆虫学会東海支部報, (24): 2-3.

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus orientalis* Gschwendtner

【選定理由】

1950年代までは各水域に見られたが、1960年中頃以降まったく姿を見なくなって久しい。全国的にも非常に少なくなり、現在本州での生息地は数えるほどしか残されていない。また残された生息地でもオオクチバスなどの外来魚の捕食圧が大きな脅威となっている。



名古屋市守山区吉根, 1959年, 森部一雄 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【形態】

体長 24~29mm。体系は長卵形でやや扁平。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で強い光沢がある。頭楕、上唇、前胸背および上翅の側縁は黄色。体下面は暗赤褐色で、腹部 3~5 節の側方に黄褐小紋を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市港区土古 (1942年採集)、名古屋市守山区 (1959年採集)、の記録が残されており、かつては平野部を中心に広く分布していたことが推測される。1960年中頃以降記録がない。

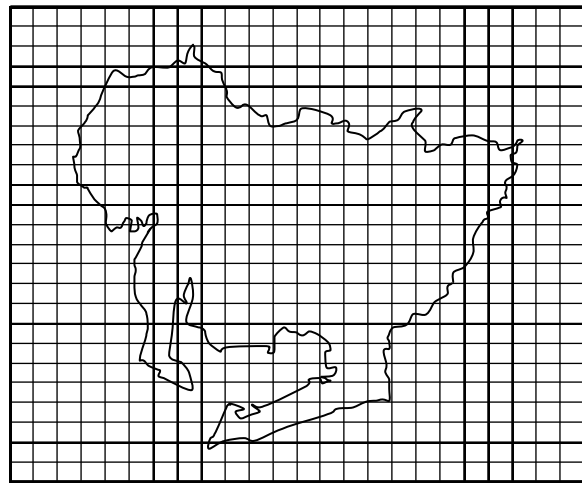
【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。

【世界の分布】

台湾、中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の水田をはじめとする水域に普通であった。南方系の種として、夏期に南からの供給によって増殖していた可能性があり、はたして愛知県内で越冬できていたのかも不明のままである。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1950年代までは各水域に見られたが、1960年中頃以降まったく姿を見なくなって久しい。1960年代からの農薬の大量使用、圃場整備等による生息地の消失と併せて、海岸線近くの水域が失われたことにより、その上陸地が失われたことにより、南方地域からの供給が断たれたのが急激な減少の大きな要因ではないかと推定されるが、実状は解明されていない。現在でも南西諸島ではよく見られ環境適応も広い。

【保全上の留意点】

侵略的外来種を根絶し、各種水域の自然環境を回復することによって、どこかに残存している個体による復元を待つ以外ない。他の水生昆虫類も最近では回復の兆しが見え始めているので期待したい。遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。

【関連文献】

- Ishihara, T., 1982. Some noteworthy insects and birds of Japan in the natural environment growing worse. Mem. Coll. Agric. Ehime Univ., 27 (3): 1-18.
長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

シャープゲンゴロウモドキ *Dytiscus sharpi* Wehncke

【選定理由】

本州ならびに佐渡に分布し、12 都府県から記録されているが、大多数の地域ですでに絶滅しており、現在残る生息地は数箇所しかないうえ、ペット業者やマニアなどによる密漁、外来魚による捕食圧、圃場整備による生息地の消失など高い絶滅の脅威にさらされている。愛知県ではこれまで本種と思われる古い採集記録が 1 例存在したが、標本が現存せず、検証できなかったために保留扱いとされていたが、2007 年に豊橋市で江戸時代中期の遺跡より本種の遺体が発見され、かつて県内にも分布していたことが確実となったため、今回新たに掲載された。

【形態】

体長 28～33 mm。オスは長卵形、メスでは卵形。背面はわずかに緑色を帯びた黒褐色で、前胸背は両側が黄色に縁取られる。腹面は暗赤褐色。後基節突起の先端は丸まる。メスの上翅には通常各 10 条の縦溝がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市の江戸時代遺構から遺体が産出している（長谷川，2007）他、江上（1943）が「コゲンゴラウモドキ *Dytiscus validus*」として瀬戸市定光寺から記録した種も本種である可能性が高い。

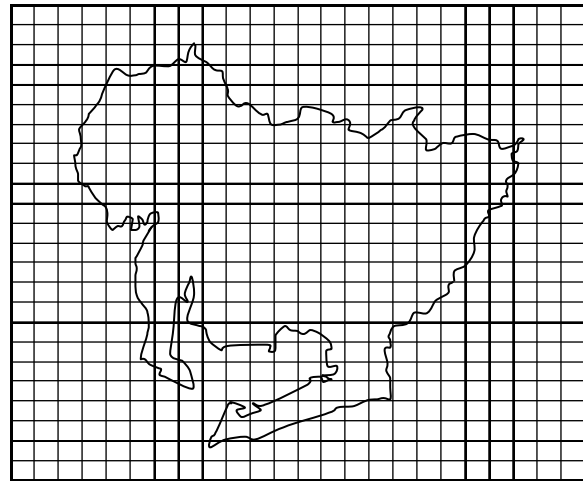
【国内の分布】

本州（千葉、東京、神奈川、新潟、富山、石川、福井、愛知、滋賀、京都、大阪、島根）、佐渡。

【世界の分布】

本州の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平地から丘陵地の水田、休耕田、放棄水田などに生息する。新成虫は 8 月～9 月に出現し、成虫越冬する。冬期でも水域で活動することが観察されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上記 2 例以外の生息情報はない。戦後の農薬の大量使用、生活污水などによる水域の汚染、圃場整備等による生息地の消失が要因として考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残す唯一の方法であるばかりでなく、多くの水生生物にとっても有効な保全手段となる。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、他地域からの安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。

【引用文献】

長谷川道明, 2007. 愛知県豊橋市の江戸時代の遺構から発見されたシャープゲンゴロウモドキ. 豊橋市自然史博物館研究報告, (17): 25-28.

江上信雄, 1943. 名古屋市外「定光寺」付近の水棲昆虫. 採集と飼育, 5 (3): 78-79.

ダイコクコガネ *Copris ochus* (Motschulsky)

【選定理由】

放牧の減少とともに、全国的に減少が指摘されている。県内では、1955年に本宮山で採集された記録があるが、その後の知見はない。

【形態】

体長 18.0~34.0mm。黒色で光沢は鈍い。頭部は点刻を密布する。前胸背板は強く点刻され、前角は裁断状で角張る。上翅は網目状の刻印に覆われる。雄には頭部に発達したツノがある。

【分布の概要】

【県内の分布】

本宮山からの古い記録がある。

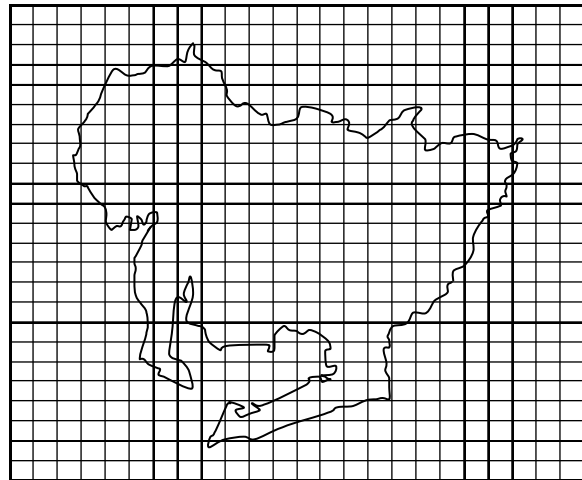
【国内の分布】

北海道、本州、佐渡島、伊豆諸島（大島、式根島、三宅島）、九州、壱岐、五島列島、熊毛諸島（口永良部島、屋久島）。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、中国、モンゴル。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

草丈の低い放牧地の牛馬糞に見つかることが多い。成虫は、5月~10月に見られ牛馬等動物の糞に集まる。灯火にも良く集まる。産卵は春から夏に行われる。糞の下、地中深く坑道を掘って室をつくり、室中に糞を固めた大型で卵形の育児球を作りその中に卵を産む。室中には複数個の育児球があり、母虫は長く室中に留まって世話をする。新成虫は秋に出現する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

牛馬が家畜として盛んに飼われていた時代には各地でみられたらしいが、農家での牛馬の需要の消失(=餌ならびに生息環境の消失)とともに衰退したと思われる。現在県内で生息が確認されている場所はない。国内で現在も残る生息地は、いずれも山地の牧場であるが、そのような場所でも全国的に減少し、発見が困難になってきている。家畜飼料への抗生物質の投与、ならびに牧草への農薬散布なども減少の原因として考えられる。

【保全上の留意点】

本種の衰退の背景には、家畜としての牛馬の需要の低下という人々の生活様式の変化に大きな影響があると考えられ、保全は簡単でない。生息地では、牛馬へ抗生物質を投与する場合、ならびに牧草へ農薬散布を行う場合には十分な配慮が必要である。

【関連文献】

- 神谷一男, 1955. 奥三河の昆虫相. 北設楽山岳地帯及鳳来寺山県立公園一帯の自然科学: 33-70.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
川井信矢ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群 1: 56. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 29-30. コガネムシ研究会.

ヒメビロウドカミキリ *Acalolepta degener* (Bates)

【選定理由】

県内においては、1952年に豊根村で採集された標本と1955年に「段戸」から採集されたという記録が残されているだけ。最後の生息情報から50年以上経過しているため、今回「絶滅」と判定された。

【形態】

体長8.5~12mm。ビロウドカミキリ類の中にあつては際だって小型の種である。褐色で、灰白色の微毛による不規則な白色部がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村と設楽町で古い記録がある。

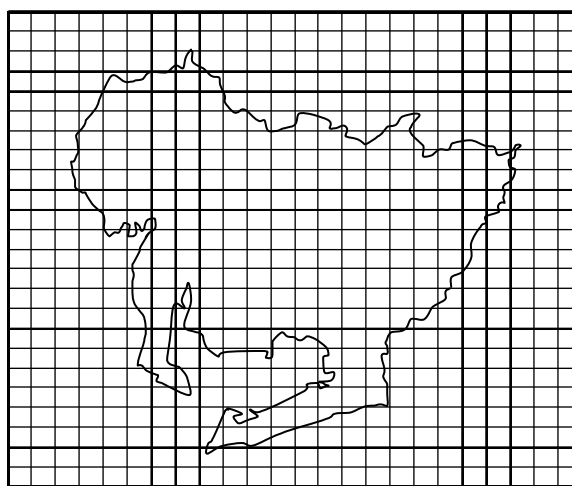
【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬に分布する。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、ロシア沿海州から記録がある。台湾産については、再検討の必要がある。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

低山地から山地の草原に生息する。成虫は6~8月に出現し、オトコヨモギやヨモギの葉や茎を後食する。幼虫はオトコヨモギの生茎内、あるいは生根内に穿孔する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

50年以上にわたって生息情報が途絶えており、県内からは絶滅した可能性が高い。本種も含め、草原性の種には絶滅が危惧される種が多く含まれる。これは、元々我が国に草原的な環境が少なく、生息基盤が脆弱であったことに加え、戦後、自然草原、半自然的な草原面積が急激に減少したことで、半ば人為的に営まれてきた草原への農薬使用等の影響などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在残る自然草原あるいは半自然的な草原環境を保全することが必要であろう。近年東京都の多摩川流域で本種の生息地が発見されており、今後河川の河川敷を中心に調査が行われ、生息地が再発見されることに期待したい。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (Faldermann)

【選定理由】

県内では1951年に東栄町御菌から記録されたものが唯一の生息情報となっている。戦後全国的に急速に減少した種であり、県内ではすでに50年以上生息情報が途絶えているため、「絶滅」したものと判定された。

【形態】

体長10～15mm。ややずんぐりとした体型をしたやや厚みのあるカミキリムシ。黒色で、前胸背正中中部と両側および上翅会合部に白条がある。日本産は、韓国産と比較的似ており、上翅が灰白色の微毛に覆われ、白っぽく見える個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

東栄町御菌で採集された古い記録があるのみ。

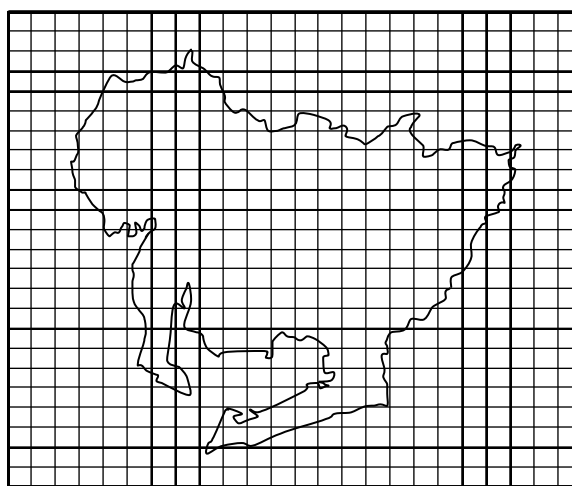
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

朝鮮半島、沿海州、中国東北部にかけて広く分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

山地の草原に生息する。成虫は5～8月に出現し、アサ、アザミ類の新芽を食べる。海外では、オオマツヨイグサも寄主植物として知られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

戦前アサの害虫として知られた種であるが、戦後、麻薬取締法によりアサの栽培が制限されるのにもない全国的に急速に減少したといわれる。現在確実に生息しているのは全国でも数えるほどしかない。県内では50年にわたって生息情報が途絶えており、すでに絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

日本では、アサの害虫として分布拡大し、アサの栽培の禁止とともに激減したと伝えられている。こうした背景から本種の保全は単純ではない。他県では、農薬などを使用しない自然草原、あるいは半自然的な草原が生息地となっており、開発行為に非常に弱いことが指摘されている。

【特記事項】

定説にはなっていないが、本種は朝鮮半島やアジア沿海州では極めて普通の種で、アサ栽培にもなって侵入した外来種であった疑いがある。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

シルビアシジミ *Zizina emelina* (de l'Orza)

【選定理由】

愛知県から本種が初めて記録されたのは 1950 年、稲沢市（旧中島郡祖父江町）の木曾川堤防からであった。その後、庄内川や矢作川などの堤防からも 1950 年代に生息が確認されたが、1961 年瀬戸市の記録を最後に報告がないこと、また、近隣諸県でのかつての産地でも近年の採集例がまったくないこと、などから愛知県からは絶滅したものと考えられる。なお、本県から「三河川合、大島川、1972 年 10 月 8 日」という 1 匹の標本が偶然発見されている（高橋，2003）。

【形態】

都市部の人家周辺などにも普通に見られるヤマトシジミに一見類似した小型のシジミチョウで、♂の翅表は青藍色、♀の翅表は黒褐色、春型はやや大きい。両者の区別は、後翅裏面の中央やや外側の黒点列が、ヤマトシジミでは円弧状に配列しているが、本種では前縁から二つ目の黒点が内側に大きくずれている。近似種のヒメシルビアシジミ *Z. otis* は、最近シルビアシジミから分離された種で、シルビアシジミに比し、裏面は淡褐色、黒点が不明瞭などの差異がある。ヒメシルビアシジミは南西諸島に産し、九州以北には分布しない。

【分布の概要】

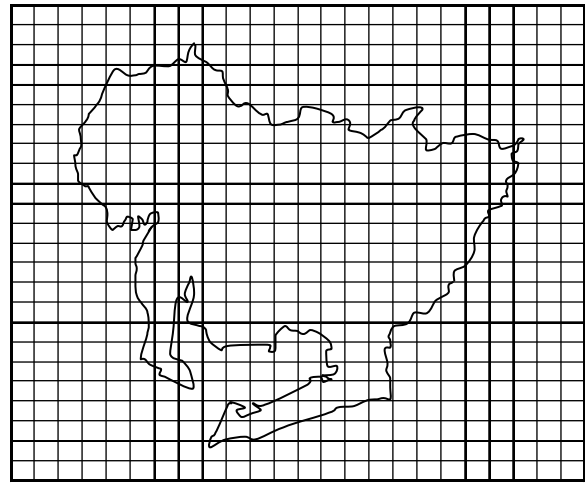
本種は関東地方以南の本州、四国、九州に分布する。種子島が南限となり屋久島からは知られない。

愛知県では、木曾川、庄内川、矢作川の堤防が主な産地であった。このほか知多半島や瀬戸市などからも記録があるが、その生息地の詳細は報告されていない。

愛知県の近隣県では、静岡県为天竜川、長野県木曾郡奈良井川、岐阜県長良川、杭瀬川、牧田川、三重県桑名市町屋川、「湯の山」などから記録されたことがある。

国外では、朝鮮半島に日本産と同じ亜種が雲南省など中国に別亜種が知られる。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種の典型的な生息地は河川の堤防草地である。幼虫の主食草はマメ科のミヤコグサであり、丈の高い草本が茂る草地には食草が自生できず、放置されてススキなどが優勢になると食草とともにシルビアシジミも生息できなくなる。食草として、このほかウマゴヤシ、コマツナギなどが知られている。最近、大阪府や兵庫県では、シロツメクサに発生することも報告された。

愛知県以外では、河川の堤防のほかに、鉄道線路脇や海岸の小さな草地、空港の滑走路周辺の草地、なども生息地として知られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

食草のミヤコグサは木曾川、矢作川の堤防で著減しており、最近数年間はその自生を確認できないでいる。矢作川の堤防では、ススキ、クズなどが繁茂し、また運動場や駐車場に整地された所もある。堤防上の道路はすべて舗装されたことも食草の自生や本種の生息に不利な環境を作り出した。しかし、日本全国的な減少の原因については、食草の自生地の減少が考えられるが、なお明らかでない点が多い。

【保全上の留意点】

本種の減少の主原因は食草の自生が減ったことであり、その保全がまず望まれる。日本で最初に本種が発見された栃木県鬼怒川流域では、堤防の草刈の時期と方法について検討されており、また食草の生育を阻害しているとされるシナダレスズメガヤの除草を行い、ミヤコグサの減少阻止、シルビアシジミの保全に成果を挙げている。

【特記事項】

本種の和名の「シルビア」は、かつて *Zizera sylvia* と命名した中原和郎が長女の名に因んだものである。この学名は使用されない。

【引用文献】

高橋 昭, 2003. 「三河川合、大島川、8.X.1972」のシルビアシジミ. 佳香蝶, 55 (215): 59.

【関連文献】

特集「シルビアシジミ最近の研究成果」, 2007. 昆虫と自然, 42 (6): 1-33.

ヒョウモンモドキ *Melitea scotosia* Butler

【選定理由】

本種は、北関東から山口県までの本州から記録されているが、局地的であり、1960～1970年にかけてこれらの多くの産地で急速に姿を消した。多産地もあったが、このような産地においても減少が著しい。

愛知県では1960～1963年に成虫や幼虫が確認されているが、以来その生息は知られていない。日本産の蝶の中でオオウラギンヒョウモンと本種が絶滅の危惧がもっとも高い。

【形態】

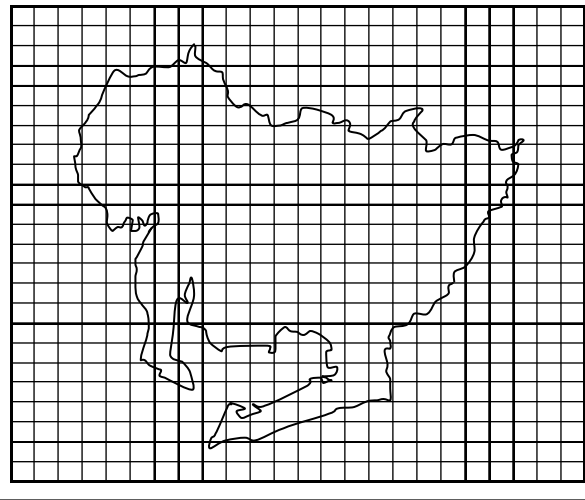
前翅長約30mmの中型のタテハチョウ。♂は名の示すように翅表は明るい橙色地に黒紋をもつ。♀は褐色調が強、黒い斑紋も大きく、容易の区別ができる。ヒョウモンチョウ類に一見似ているが、形態も生態も異なる。

【分布の概要】

かつてはヨーロッパに産する *M. phoebe* の亜種とされたが、現在では東アジアの特産の独立種とされる。国外では、朝鮮半島、中国の東北部と北部に分布する。

日本では本州のみから知られる。中部地方では長野県と山梨県に産地が比較的多かった。岐阜県では飛騨山地と東濃とからのみ知られ、愛知県では豊田市（旧小原村・藤岡町）が唯一の産地であった。近畿地方からは未知、中国地方の山地帯にはいくつかの孤立した産地がある。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種の産地の多くは標高400～1000mの山間のマアザミなどが自生している明るい湿地ないしは湿性草原であり、極めて局地的である。幼虫の食草は、長野県ではタムラソウ、ノアザミ、ノハラアザミなどのキク科、愛知県での食草はキセルアザミ（マアザミ、サワアザミ）であった。キセルアザミの分布は、必ずしも局地的でなく、ノアザミやタムラソウは山地での分布は広い。愛知県の産地は、丘陵の窪地に生じた湿地で、周辺はマツの幼木の生えた疎林であった。本種とともにヒメヒカゲやウラナミジャノメを産し、晩夏になると湿地周辺のワレモコウにゴマシジミが見られた。

成虫は、年1回6月頃から羽化し、高標高の産地では7月に最盛期を迎え、1～2週間後から産卵が始まる。成虫の見られる期間は1か月以内と短い。幼虫は年内に5齢に成長し、巣を作り、集団をなして越冬し、翌春9齢まで達し、蛹化、羽化する。成熟幼虫は単独で行動する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県では、1960年6月9日に豊田市（旧西加茂郡藤岡町）三箇の標高460mの湿地で1♂が採集されたのが最初の発見である。同月19日には4頭採集、20頭目撃、翌1961年4月には21頭の幼虫が採集、6月11～18日に16頭の成虫が採集された。1963年6月23日に1♀が採集されたのが最後で、以来愛知県からは確認されていない。このほか、同市（旧小原村）大平と北においても目撃記録がある。長野県の最南の産地であった下伊那郡売木村では1968年の記録が最後である。かつて多産地が少なくなった長野県全体でもほぼ同じころから激減し、近年の記録がない。兵庫県は1976年の記録が最後であるという。このように日本全国の産地から、ほぼ同じ頃に本種が姿を消したことから、産地の局所的な理由というよりは、種そのものの内在する原因、または日本全体に共通する環境的原因が考えられるが、明らかにはされていない（高橋, 1976）。

【保全上の留意点】

本種は少なくとも現時点では愛知県から絶滅したものと考えられる。もし、県下で再発見されるようなことがあれば、環境全体の保全など緊急の対策を講ずる必要がある。

【特記事項】

英国では、近似種が一時的に著減したが、のち回復したという事例がある。

【引用文献】

高橋 昭, 1976. 名古屋地方のヒョウモンモドキ. とくに extinction 消滅について. 佳香蝶, 28 (107): 33-37.

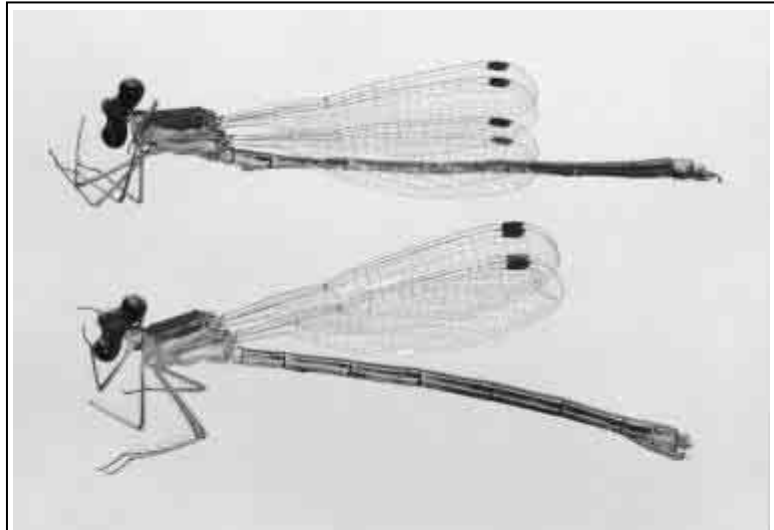
コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する（絶滅率・現存数については、資料編：評価方法の詳細を参照）。
愛知県産トンボで、記録が絶えて最も久しい種である。

【形態】

金属光沢のある緑の体色をもつ可憐なイトトンボである。邦産のアオイトトンボ属 4 種中、最も小さい。
和名は同属他種に比べて翅幅がやや広く、翅が短く（=小さく）見えることに由来する。



上♂, 下♀.
名古屋市千種区田代町, 1951年10月6日, 高崎保郎 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部から丘陵地にかけての15市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけての抽水植物の多い、古い池沼に生息する。未熟成虫は、同属のアオイトトンボ等のように林縁へ移動せず、羽化した付近の抽水植物内で過ごすようである。幼虫は、抽水植物などにつかまっている。

秋に産卵された卵はそのまま越冬して翌春孵化し、夏季に羽化する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在、県内に確実な産地はない。1980年代の刈谷市での記録が最後と思われる。

本種は植生環境の破壊等、微妙な環境変化に弱く、他種に先駆けて絶滅することが本県および他県でも確認されている。さらに、比較的古い水域に固執し、分散力が小さいことも減少に拍車をかけたと考えられる。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域となる岸辺のヨシ原等の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

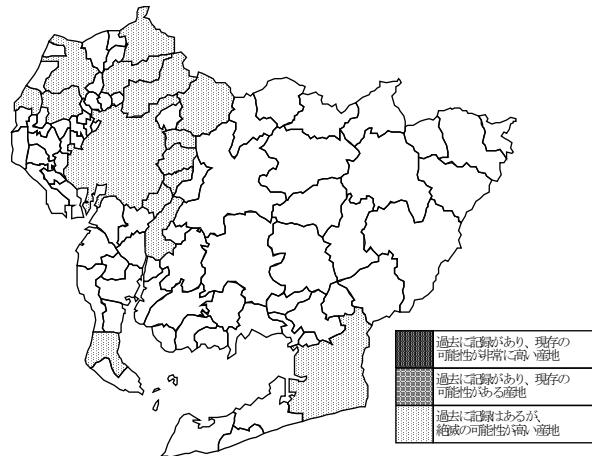
本種は全国的にも産地が限定され、その原因として、♀の産卵管の未発達による被産卵植物の狭選択性を理由とする見方があるが、比較的組織の堅いヨシやガマへの産卵も見られることから、必ずしもそれだけが分布を決定づけている訳ではなさそうである。

隣県の状況は、三重県では絶滅状態、岐阜県でも絶滅状態、静岡県では浜松市に現存しているが、東海地方としても危機的な状況にある。

【関連文献】

安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(7). 佳香蝶, 58 (227): 41-48.

県内分布図



ベッコウトンボ *Libellula angelina* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。

2004年に常滑市で新産地が発見されたが、翌年には絶滅し、県内に確実な生息地はない。



♂. 常滑市西阿野, 2004年4月24日, 安藤 尚 撮影

【形態】

翅の基部と結節に顕著な黒褐色斑があり、ずんぐりした毛深い中型のトンボである。

和名は未熟成虫の体色が鼈甲色をしていることに由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部を中心とした16市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は、抽水植物が繁茂して泥深く、開放的な池沼に生息する。幼虫は、水中の枯れたヨシ等の堆積物につかまることが多い。羽化は4月に始まり、成虫は5月の短期間に集中的に見られる。1年1化である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1998年以来記録が途絶えていたが、2004年に常滑市で新産地が発見された。造られてから10年ほどしか経過していない調整池で、他の水域とほぼ隔離されており、天敵が少なかったことが生き残りの要因と推測された。

幼虫・成虫とも確認され、繁殖していることは間違いなかったが、2005年以降は1頭も姿を確認できていない。本種の消滅と入れ替わるようにアメリカザリガニが数十倍規模の密度で大発生しており、その一方で植生環境の悪化は無いことから、ザリガニによる幼虫捕食が本種の絶滅要因と考えられる。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域となる抽水植物の堆積物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地と灌木の茂みの確保
- 3) 幼虫 / 成虫を捕食するアメリカザリガニや外来魚の移入禁止

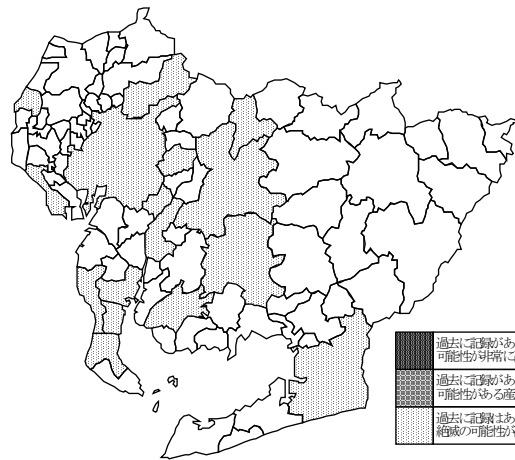
【特記事項】

1994年に種の保存法に指定された最初の昆虫であるが、同法は生息地を環境破壊から守る法的手段が非常に弱く、指定後も産地を減らし続けた。中部地方以東の確実な生息地は静岡県のみである。

【関連文献】

- 安藤 尚, 2005. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(4). 佳香蝶, 57 (223): 55-62.
吉田雅澄, 2004. 愛知県にベッコウトンボが現存. Aeschna, (41): 24-28.
吉田雅澄, 2005. 愛知県のベッコウトンボが絶滅か. Aeschna, (42): 33.

県内分布図



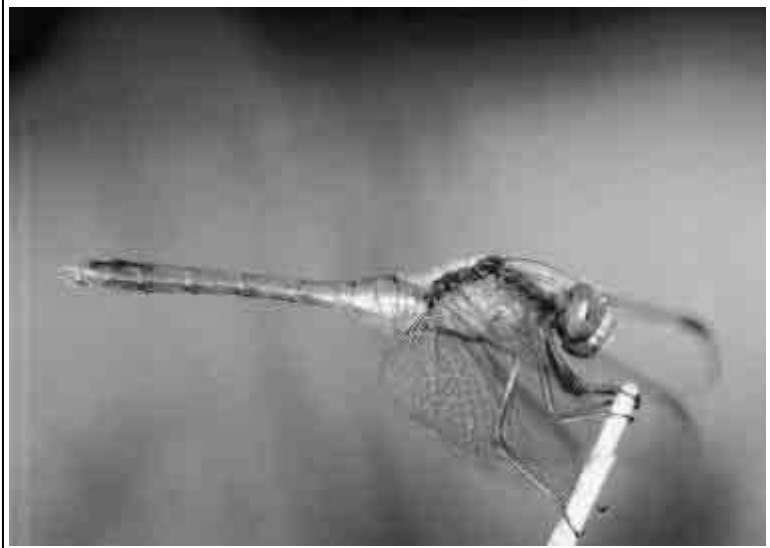
オオキトンボ *Sympetrum uniforme* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。
現在県内に確実な生息地は存在しない。

【形態】

体色および翅全体が淡い橙黄色をした邦産アカネ属の最大種であり、和名も大きな黄色のトンボという意味である。



♂. 日進市赤池, 1985年10月13日, 清水典之 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部から丘陵地にある 15 市町村 (旧市町村単位) で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州北部にかけて分布し、対馬でも記録されている。

【世界の分布】

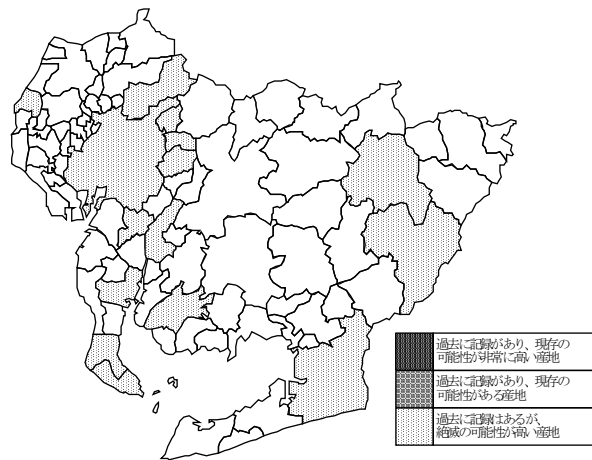
朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、平地から丘陵地にかけての抽水植物や汀線付近の草本が豊富で、かつ開放的な大きめの池沼で見られる。未熟成虫は、かなり移動することもあり、発生地から離れた山間部での採集例も報告されている。幼虫は、水域の浅い泥底で得られている。

7月頃から羽化し、10月頃に水域へ戻ってきて生殖行動を行なう。11月でもかなりの個体が見られることが多い。1年1化である。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張では日進市の機織池で1988年まで恒常的に発生していたが、その後姿を見なくなった。西三河では1970年代まで刈谷市などで発生していたが、1980年代には絶滅した。東三河では1993年の設楽町での記録が県内における直近の記録でもある。ただし同地には本種の発生するような池沼はなく、飛来個体と推測される。

成虫は遠浅でヨシなどの抽水植物と浮葉植物のある池沼を好む傾向にあるが、わずかな環境変化にも敏感で、護岸工事等がなされると、すぐに姿を消すことが多い。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域となる浮葉植物等の植生のある環境の確保
- 2) 成虫が休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

東海地方としても2000年以降は確認されていないようであり、壊滅状態にある。

【関連文献】

高崎保郎, 1987. 名古屋市名東区及び日進町の溜池の注目すべきトンボ2種. ため池の自然, (5): 3.

コバンムシ *Ilyocoris cimicoides exclamatoris* (Scott)

【選定理由】

全国的に産地は局所的である。浮葉植物が豊富な湖沼に生息しているが、徐々に良好な池が少なくなっており、その生息が危惧されている。近年の確実な生息地は知られていない。

【形態】

体長は11～13mm。体型は扁平で小判型をしている。生時の体色は美しい淡緑色であるが、死後は黄変する。前脚は鎌状で、腿節は特に太い。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、名古屋市港区、名古屋城の堀などの記録があるが、いずれも古い記録ばかりである。

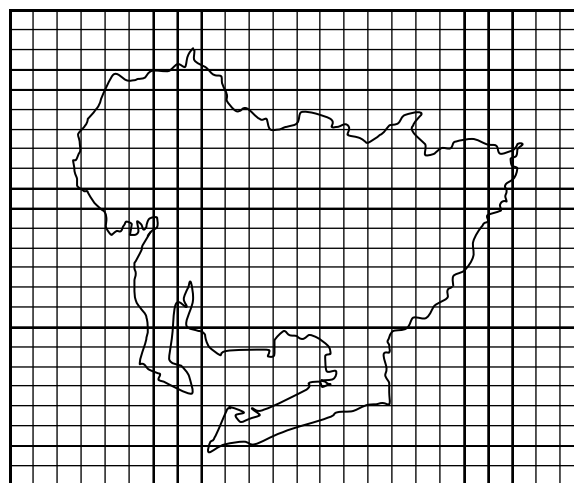
【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

中国、韓国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平地から丘陵地のヒシ、ヒルムシロなどが繁茂する溜め池などに生息している。ヒシの浮囊などに産卵することが知られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

古い記録のみで、ここ20年近く確実な記録がない状態である。国内でも残された産地は極めて少数である。ヒシが繁茂していてもオオクチバスなどの外来魚が入り込んでおり、確認できていない。水質悪化や外来魚による捕食圧などによって減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

今後本種が発見された場合は、溜め池の水質管理や水草の保護に留意し、周辺環境も含めた水源確保にも気をつける必要がある。また、外来魚の駆除も積極的におこなう必要がある。

水草に産卵するため、コイや水草など水生生物の移植により、それまで確認されなかった場所に突如として発生する事例が示唆されている（川野，2006）。安易な移植行為は慎むべきで、記録の取り扱いにも考慮する必要が出てくると考えられる。

【引用文献】

川野敬介，2006. コバンムシの山口県からの初記録. *Rostria*, (52): 59-60.

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司，1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
矢崎充彦・石田和男，2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

カワラハンミョウ *Cicindela laetescrpta* Motschulsky

【選定理由】

全国的にも生息地が急速に減少している。愛知県においては既知産地では生息情報は途絶えており、すでに絶滅したものと思われ、新産地は発見されていない。

【形態】

体長 14～17mm の大型のハンミョウで上翅の白紋と外縁の白帯は融合する。一般に太平洋側の個体群は日本海側の個体群より黒化する傾向が認められるが、木曾川流域産の個体群は白化する傾向があり、特徴的である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県からは渥美半島伊良湖岬（佐藤，1980）、南知多町内海（穂積，1974；佐藤，1980）、名古屋市守山区竜泉寺（佐藤，1980）、名古屋市守山区庄内川（穂積ほか，1975）、愛西市（旧八開村）（安藤，1982）、稲沢市（旧祖父江町）（安藤，1982）、一宮市（旧尾西市）（安藤，1982）にかけての木曾川河川敷から記録されているが、最近の生息情報が全くない。

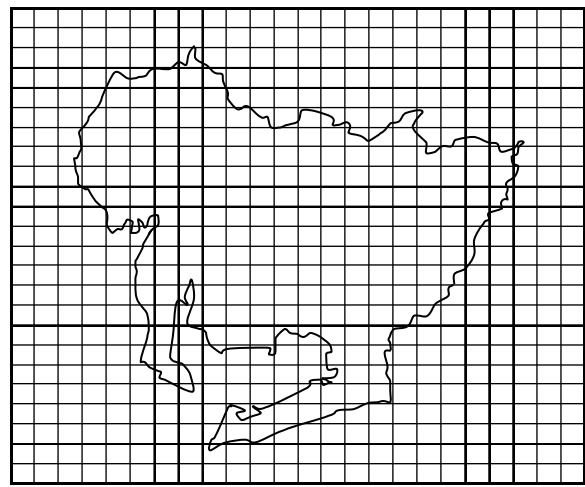
【国内の分布】

北海道、本州、九州、四国の河川敷や海岸の砂浜に分布している。

【世界の分布】

朝鮮半島、济州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア東部。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

海岸や河川敷の砂地に局所的に生息し、成虫・幼虫ともに小動物を捕食する。成虫は 8 月中旬に現れる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

木曾川流域では 1990 年代前半から急速に個体数が減少し、1995 年以降は度重なる調査においても発見できないことからすでに絶滅している可能性が高い。渥美半島の海岸線に未知の生息地が見つかる可能性を期待するが、状況はかなり厳しいといわざるを得ない。

減少要因として挙げられるのは、海浜や河川敷の汚染や護岸改修による生息地の破壊、また上流でのダム建設によって流下する砂が減少し、砂浜の面積そのものが減少したり、草地化したりしたこと等が考えられる。さらに近年のアウトドアブームにより河川敷への人の侵入が増えたこと、特に四輪駆動車やサンドバギーなどの砂浜への乗り入れによる生息地の破壊は大きな原因と考えられる。

【保全上の留意点】

木曾川流域の生息地については、生息地への立ち入りや車の乗り入れは慎むべきである。ダム建設による下流、海岸での砂浜の減少は本種だけでなく河川や海浜の生態系に非常に大きな弊害を与えており、長期的には、河川敷の生態系の保全が必要である。

【引用文献】

- 安藤 尚，1982. 木曾川河原のカワラハンミョウ. 尾張の自然を考える会々報, (6): 1-3.
穂積俊文，1974. 東海甲虫誌(20). 佳香蝶, 26 (100): 105-116.
穂積俊文・松井一郎・佐藤正孝，1975. 庄内川の昆虫. 建設省庄内川工事事務所.
佐藤正孝，1980. 環境庁編，日本の重要な昆虫類，東海版：84-92.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか，1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

フタモンマルクビゴミムシ *Nebria pulcherrima* Bates

【選定理由】

本種は河川の礫と砂が混じる環境に生息する代表的な種だが、近年は全国的に生息の確認が困難になっている。県内においては、前回の調査からもまったく生息情報が得られず、かつて生息地があった庄内川においては本種の生息可能な環境が残されていないことから、今回ランクが絶滅危惧 I A類に引き上げられた。

【形態】

体長 11~12.5mm の中型のゴミムシで身体は短太で平たく、前胸は心臓形で側縁が基方で強く湾曲する。全身赤褐色で上翅中央に一对の特徴的な大きな黒紋を有することからこの名があるが、斑紋には変異が多く、側縁と翅端を残して全体黒色となる個体もある。よく似たカワチマルクビゴミムシは、頭部の後縁と前胸背の中央部が黒色となることで区別できる。



名古屋市庄内川, 1941年5月4日, 穂積俊文 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

1941年に名古屋市守山区竜泉寺下で採集された記録があり、この標本は、豊橋市自然史博物館に保管されている。この庄内川河川敷が唯一の記録地として知られている。これ以外では、1975年に名古屋市西区小田井町の庄内川遊水地で本種が採集されたという情報があり、庄内川には確実に生息していたらしい。

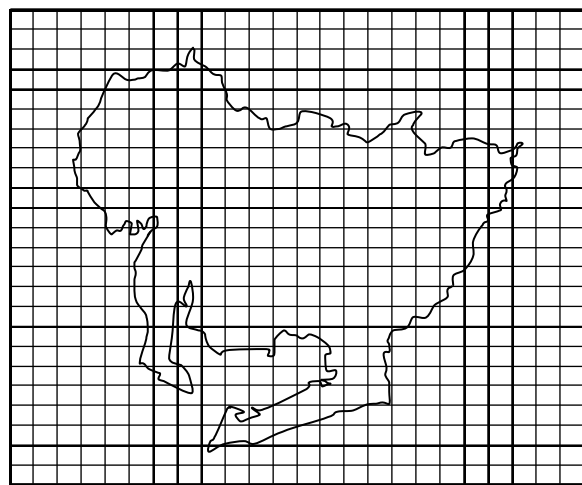
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

河川敷の砂地から小砂利、礫の混じる環境に生息する。詳しい生態的特性は不明。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

20年以上生息情報は途絶えている。砂礫地に生息する種であるので、砂防堤の建設によって生息環境が失われたことが原因と考えられる。近隣地域では、静岡県の安倍川ではまだ生息している。

【保全上の留意点】

河川整備にあたっては、十分な環境影響評価を行うことが望まれる。

【関連文献】

穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌(9). 佳香蝶, 12 (41): 17-23.

キベリマルクビゴミムシ *Nebria livida angulata* Banninger

【選定理由】

かつては平野部に普通の種とされていたが、近年生息地は急激に減少しており、県下では最近の生息情報がない。

【形態】

近似種のフタモンマルクビゴミムシ、カワチマルクビゴミムシとは、頭部は全体が黒色で複眼の間の頭頂部に一對の赤斑があること、上翅は周縁部を除いて黒色となり、第3間室に剛毛孔点があることなどで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

庄内川河川敷（竜泉寺下、下之一色町、高蔵寺町）、名古屋市天白区（2例）で採集記録があるが、古い記録は近似種であるカワチマルクビゴミムシを誤認している可能性もある。名古屋市天白区で採集された2個体については、標本によって確認できたが、いずれも1950年代の採集品である。

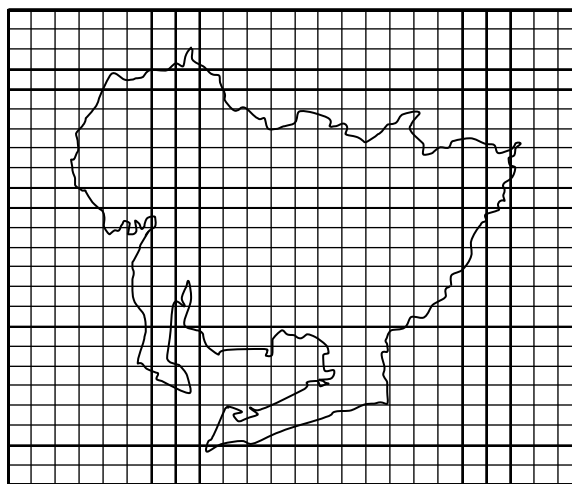
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、シベリア東部。基準亜種はヨーロッパからアルタイに及ぶ広範に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平地の大きな河川敷の水辺から離れた、やや乾燥した草地で見つかる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

この40年ほどの間、生息情報がもたらされていない。具体的な減少の要因は不明であるが、河川改修や草地、低湿地の開発減少、農薬の影響などが考えられる。

【保全上の留意点】

生息状況、生態の詳しい調査が先決と思われる。また、河川の改修、管理にあたっては、その河川が本来もつ自然環境を損なわないような配慮が必要であり、可能であれば、本来の姿に復元する努力も必要である。

【特記事項】

三重県では、絶滅種とされている。

【関連文献】

穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌(9). 佳香蝶, 12 (41): 17-23.

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark)

【選定理由】

かつては、平野部～丘陵地の止水域に広く分布したと推測されるが、全国的に減少が著しい。県内においては、2例の記録があるが、いずれも1960年以前のものであり、近年はまったく確認されていない。

【形態】

体長12～14mm。体型は卵形でよく盛り上がり光沢がある。背面は黄褐色。頭部に黒色のV字紋がある。前胸背は前・後縁に黒横帯紋がある。上翅は基部と会合部が細く黒色で、網目紋様も黒色。体下面は暗赤褐で、前胸と側片は暗黄褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市港区（穂積・佐藤，1957）ならびに長谷川（2002）によって確認された1959年に採集された名古屋市守山区産の標本が知られるのみ。

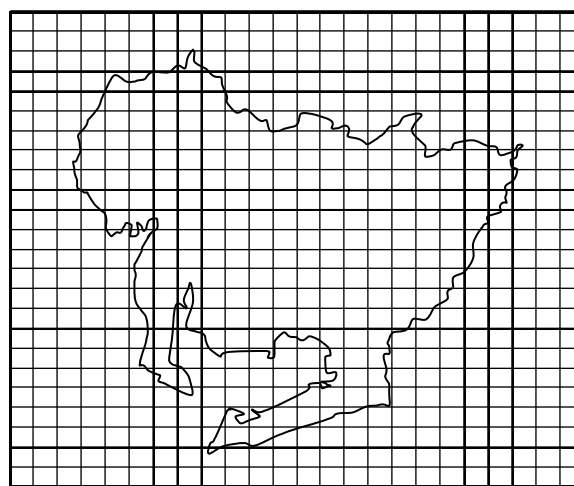
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【国内の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平野から丘陵にかけての水田、池沼など各種止水域に生息していた。水草などが生育する水域に多いが、生態についてはよく判っていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上記2例以外の生息情報はない。水田の圃場整備、水質の汚染などによる生息地の減少、環境悪化が主要な減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。現在ある自然状況に近い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

長谷川道明，2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.
穂積俊文・佐藤正孝，1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

佐藤正孝，1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース (65): 1-4.

オオクワガタ *Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

【選定理由】

日本最大のクワガタムシで各地で減少傾向が甚だしく、また大きな採集圧にさらされている。さらに近年の飼育ブームにより同種の外国産を含む多くの飼育個体がペットショップ等にあふれており、放虫あるいは逃走個体によるいわゆる「遺伝子汚染」の恐れが高まっている。県内でも各地で外国産と思われる個体や飼育交配したものと思われる個体が野外で見つかっている。

【形態】

体長 25～65mm。オスでは大あごを含めると 70mm を越える日本最大のクワガタムシ。黒色で、オスの大あごは強大で、よく発達したオスでは中央より前方に斜め上方に向く大きな内歯がある。メスおよび小型のオスでは上翅に点刻列のある縦条がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市定光寺（河路, 1986）、春日井市坂下町（河路, 1986）、小牧市小牧山（穂積, 1974）、稲沢市（穂積, 1965）、津島市（松永, 1979）など尾張地方平野部を中心に分布する。蒲郡市など三河地方平野部からも未公表ながら生息情報があり、かつては県内平野部に広く分布していたと思われる。

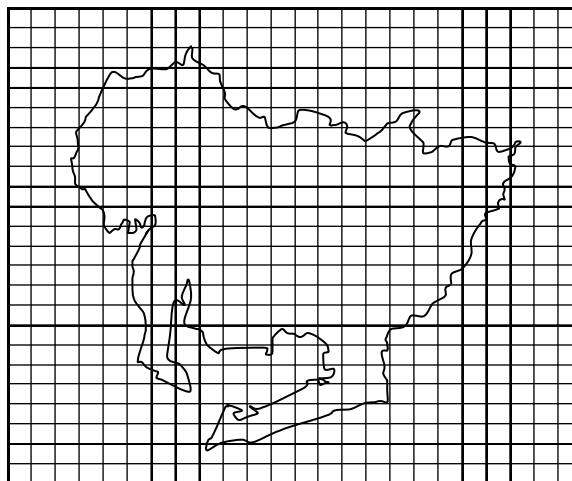
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、タイ、インド。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

主に平野部の河畔林、寺社林、低山帯の雑木林などに生息する。成虫は夜行性で 6 月から 9 月に出現し、コナラ、アベマキ、ヤナギ類などの樹液に集まる。幼虫は、アベマキ、ポプラ、コナラ、エノキなど各種広葉樹の白色腐朽した朽ち木中を食べて育つ。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

河川敷内の林を中心に、県内平野部に現在も僅かながら生息すると思われるが、個体密度は極めて低いと考えられる。減少の原因としては、平野部を中心に生息する種であるため、都市化の影響を強く受けたこと。また、戦後のエネルギー転換によって、燃料炭の生産が行われなくなったため、生息地である里山の雑木林が消失したことが考えられる。さらに近年のクワガタムシ人気から、主にペット業者や愛好家の手による産卵木である朽ち木の破壊を含む過度な採集圧がかかっていることも見逃せない。また、外国産の放虫による遺伝子の混雑の危険性も高い。

【保全上の留意点】

河川敷林を保全維持するとともにペット業者などによる過度の採集は慎むべきである。また遺伝子汚染を防ぐため、飼育個体の放虫や逸出の防止に十分配慮する必要がある。

【引用文献】

- 穂積俊文, 1965. 船越俊平氏の標本箱より. ナビニュース, 55: 530.
穂積俊文, 1974. 東海甲虫誌(20). 佳香蝶, 26 (100): 105-116.
河路掛吾, 1986. オオクワガタの採集記録. 佳香蝶, 38 (148): 60.
松永晴彦, 1979. 愛知県津島市でオオクワガタを採集. 佳香蝶, 31 (119): 44.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

チャイロヒメコブハナカミキリ *Macropidonia japonica japonica* (Ohbayashi)

【選定理由】

カツラの巨木に生活の大部分を異存する種で、全国的にも生息地が限られる。県内では面ノ木峠が唯一の生息地であり、確認されている発生木も一本があるにすぎず、生息基盤は極めて脆弱である。なおかつ、心ないマニアによる過度の採集、採集目的による発生木周辺環境の悪化が懸念される。前回の調査以降、発生が確認できなくなっていることから、今回ランクが絶滅危惧 I A 類に引き上げられた。



豊田市, 1994年6月, 長谷川道明 採集,
長谷川道明蔵

【形態】

体長 11~16mm。Pidonia 属のカミキリムシを一回り大型にしたような体型をしたハナカミキリ。体色は一様に黄褐色。各脚は長く、前胸背には瘤状の隆起をもつ。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、豊田市(旧稲武町)以外確認されていない。この産地は、本種の最も南の生息地にあたる。

【国内の分布】

山形県~岐阜県(飛騨山脈)までの本州に分布する。西日本に分布する近縁のシコクヒメコブハナカミキリとは飛騨川あたりを境に住み分けている。

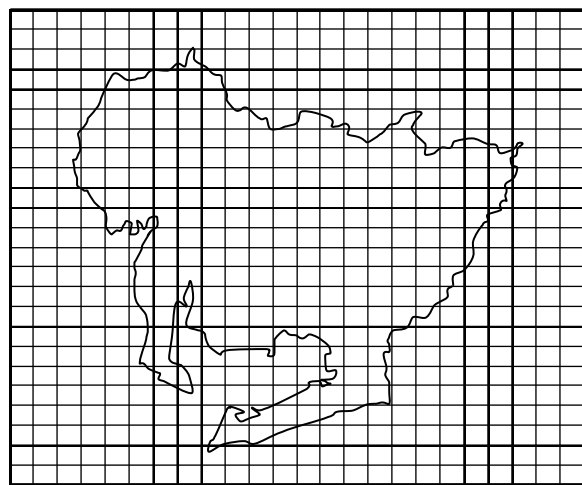
【世界の分布】

日本の特産種である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

カツラの巨木に生活の大部分を異存している。成虫は、6~7月に出現。オスはカツラの巨木周辺の下草上に見つかる。恐らく、後から発生するメスを待っているものと考えられる。メスは苔むしたカツラの樹皮下に産卵すると思われる。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在県内で本種の発生木は唯 1 本しか確認されておらず、周辺に本種が将来にわたって本発生可能な状態にあるカツラは見あたらない。したがって状況は極めて深刻である。減少の原因としては、ブナ原生林の減少があげられる。2007年の現地調査では、発生を確認することができなかった。

【保全上の留意点】

発生木であるカツラの巨木とそのまわりの環境を保護する必要がある。巨視的には、カツラが生育するブナ林内の保全対策が必要である。ハイカーによる発生木周辺の踏み荒らしや、マニアによる過度の採集も慎むべきである。

【特記事項】

本種には地理的変異があり、本県に分布する個体群は、黒化傾向が強い。

【関連文献】

長谷川道明, 1992. 愛知県で採集されたチャイロヒメコブハナカミキリについて. 豊橋市自然史博物館研究報告, (2): 37-39.

タケウチホソハナカミキリ *Strongalia takeuchii* Matsushita et Tamanuki

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林のみから知られていたが、最近の生息情報がない。

【形態】

体長 11~15mm。細長い中型のハナカミキリ。前胸背は黄色で、2 本黒色の縦筋がある。上翅は黒色で、3 本の黄色の帯がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では設楽町（蟹江ほか，1977；竹内ほか，1980）のみから知られる。

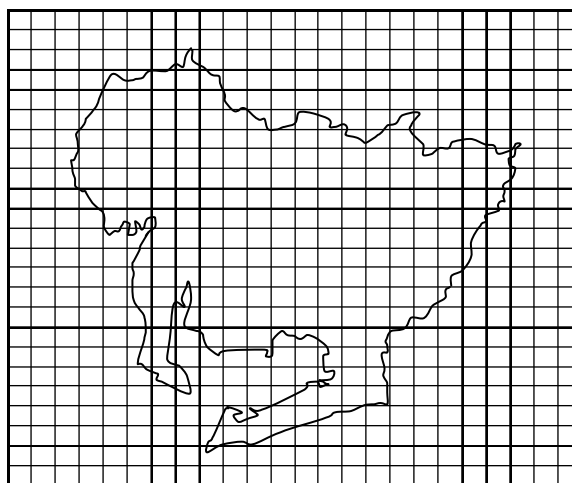
【国内の分布】

北海道、本州、四国に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

自然度の高い森林に生息。生息地の大半は太平洋型のブナ林である。成虫は 7~8 月に出現し、ノリウツギやリョウブ、ツルアジサイなどの花に飛来する。幼虫の寄主植物はモミ、ミズバイが知られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1980 年代までは、少ないながらも生息情報をもたらされていたが、1990 年代以降生息情報は途絶えている。ブナ原生林の減少と林内の乾燥化の影響が考えられる。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁の過度な伐採や枯れ死木の伐採は、林内への乾燥化をもたらす生息環境を奪う危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

設楽町には本県には珍しいモミ・ツガの群落が知られている。本種はその原生林内ではモミを寄主植物として利用していると考えられ、この原生林を代表する昆虫の一つと位置づけられる。

【引用文献】

蟹江昇・竹内克豊・今瀬雅行，1977. 名古屋昆虫同好会奥三河採集会—カミキリの記録—。佳香蝶，29 (111): 34-35.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一，1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ。愛知県豊根村の動物: 231-285.

【関連文献】

佐藤正孝ほか，1990. 愛知県の甲虫。愛知県の昆虫，(上): 200-477. 愛知県。

ホシチャバネセセリ *Aeromachus inachus* (Ménétrières)

【選定理由】

本種は、本州と対馬に産し、いずれの産地においても局地的である。愛知県では、1954年8月13日に豊田市（旧稲武町）黒田で3頭が初めて採集された。以来、三河の山間地から少数の産地が知られており、1977年8月10日に豊田市（旧旭町）伊熊でオオアブラススキから卵と幼虫が発見された（葛谷, 1978）。最近10年以上にわたり観察例が知られない。絶滅した可能性が高い。愛知県の近隣地方でも激減が報じられており、これは全国的な傾向である。

【形態】

日本産のセセリチョウ科でもっとも小型。翅表は暗褐色で、前翅に小白点が弧状に並ぶ。後翅の表面は無紋、裏面は特有な斑紋をもつことなどの特徴から、近似種とは一見して区別することができる。

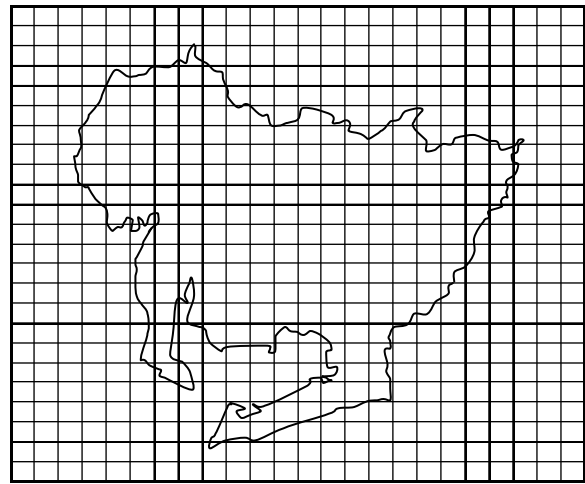
【分布の概要】

本州では、青森県から山口県にわたって産地が知られる。東北地方の中央部、近畿地方には大きな分布空白地がある。九州では対馬のみに産する。北海道、四国、佐渡島からは知られない。

愛知県では、豊田市（旧稲武町、旧旭町）が知られるに過ぎない。岐阜県美濃地方では、美濃加茂市、中津川市、恵那郡岩村町から、また愛知県北設楽郡に接する長野県下伊那郡では、売木村、根羽村から少数の記録がある。

国外では、朝鮮半島、中国、台湾など東アジアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は、なだらかな丘陵や山地の草原や林縁を敏捷に飛び、低木や草の葉上に止まり、後翅を水平に、前翅を半開きにして日光浴をする。ウツボグサやヒメジョオンの花を訪れることが多く、時に湿った地面で吸水することもある。曇天の日は活動がみられない。旧旭町ではカシワの疎林の下草上によく見られ、7月上旬と8月上旬に採集例があることから、年2回の発生と思われる。

幼虫はオオアブラススキ（イネ科）が主な食草。その葉裏にとまり、葉表を表面にするように筒状の巣を作る習性があり、その巣の特徴から幼虫が発見できる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

旧旭町では1981年8月30日に1♂が採集されて以来、比較的良好に調査されているにもかかわらず記録がない。生息地のカシワ林の伐採、宅地や耕地化、林間の小道の舗装、林縁の草地の減少などが原因かと思われる。

【保全上の留意点】

本種は、特異な分布と生活様式をもつ。食草はオオアブラススキ以外に記録がほとんどないが、オオアブラススキの衰退や減少の報告はない。このため、減少の直接原因を確定することも、その保全対策を具体的に明確化することも困難である。少なくとも、疎林的環境を守り、下草刈りの方法や、農薬散布を慎重に行うことが望まれる。

【特記事項】

豊根村三沢として引用された1978年5月14日の記録は、チャマダラセセリの誤りである。

長野県木曾郡大桑村のぞきど高原には1980年代まで採集例が多かった。1990年頃から減少が目立つようになったが、2006年7月30日に1♂が採集された（高橋昭）。

【引用文献】

葛谷 健, 1978. 愛知県東加茂郡旭町のツマグロヒョウモンとホシチャバネセセリ. 佳香蝶, 30 (114): 24.

【関連文献】

高橋 昭ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

チャマダラセセリ *Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

本種は、北海道東部、本州（東北・関東・中部）、四国に分布する。本州では近畿・中国地方からは知られていない。

愛知県は関東から中部にわたる分布圏の西南端に当たる。いずれの産地も生息地はごく限定されている。かつては、道路脇や人家周辺の草地などにも生息しており、生息地では個体数はかならずしも少なくなく、成虫を始めとして、卵、幼虫なども同時に見出されることもまれではなかった。

1980年代から、日本いずれの産地でも急速に姿を消した。愛知県では1990年代以降の記録がない。

【形態】

普通種のダイミョウセセリにやや類似するが、明らかに小型、翅表の白紋は顕著、後翅表にも明瞭な白紋をもつことなどから、同定は容易。日本産では、同属のヒメチャマダラセセリ（北海道日高山脈に生息）が唯一の近似種である。

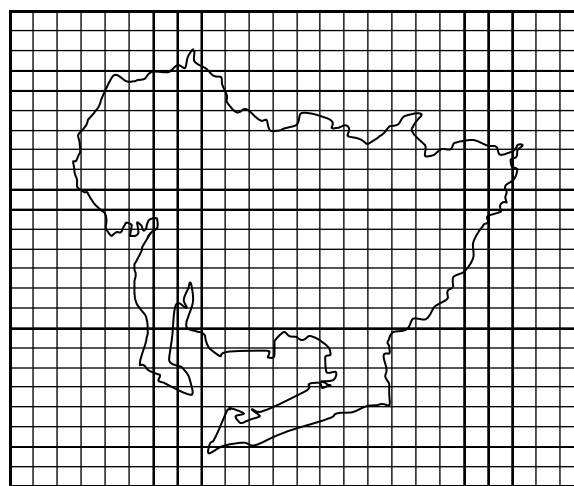
【分布の概要】

上述のように、本州での分布も特異的である。本州中部では、長野県と山梨県を中心に生息し、その周辺に若干分布圏が拡大していたが、近年いずれの産地もほとんど絶滅ないし消滅に近い。

愛知県では、1951年に北設楽郡下川村と本郷町（現在の東栄町下田、川角、本郷）から初めて記録され、その後、北設楽郡の稲武町（現豊田市）、設楽町、豊根村、および東加茂郡足助町、旭町、西加茂郡小原村（いずれも現豊田市）から少数の産地が報告された。

国外では、朝鮮半島、中国、モンゴルなど、東アジアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地の明るく広い草原に多くの産地があった。また、人家、道路、堤防、疎林などの周辺の小規模の草地にも生息していた。1950～60年ころの信州の春は、ミツバツチグリ、キジムシロ（バラ科）などの幼虫の食草が多く自生し、成虫もこれらの花で求蜜するのがよく観察され、春の普通種とされていた。幼虫は、これらの食草の葉を折り曲げたり、重ねたりして巣を造り、蛹もこの巣から発見されるため、野外で幼虫や蛹を見出すことも困難ではなかった。

愛知県では、4月下旬から5月中旬、7月中旬から8月中旬に記録されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県では、豊田市（旧旭町）の1960年7月の記録、北設楽郡設楽町の1982年4月の記録が最後で、以来愛知県下からの記録が見出せない。恐らくこの頃に県下から姿を消したものと推察される。長野県でも、1980年以降は木曾郡と伊那地方を除いてほとんど見られなくなった。木曾郡開田村では、2005年5月の記録がある。

減少の理由は明らかにされていない。各地とも食草の自生が減少したことが知られているが、食草が豊富に自生している地域でも本種は見られなくなっている。チャマダラセセリの産地には、ゴマシジミもともに生息しているところがあったが、これらもともにほぼ同じ頃から減少が確認されており、その共通原因の解明が望まれる。

【保全上の留意点】

減少の原因が不明であり、原因に対する対策は講じられない。道路の舗装などは必要最低限にし、草原や草地の保全や農薬散布の際の十分な配慮などに努める必要がある。

【特記事項】

岐阜県中津川市（旧恵那郡阿木村）や恵那市（旧恵那郡上矢作町）からも記録があり、前者では多産していた。今後、これら東濃地方や長野県木曾郡での発生にも注目する必要がある。

【関連文献】

高橋 昭ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

ゴマシジミ *Maculinea teleius kazamoto* (H.Druce)

【選定理由】

最近、本種は激減してしまい、2001年以來公式記録(高橋ほか, 2001)がないまま推移している。近い将来、愛知県では絶滅が危惧される1種と考えられている。全国的にも個体数が減ってきているため保護の必要性が叫ばれている。

【形態】

本種は、地理的ならびに個体的な変異が著しく、日本産シジミチョウ科の中でも最も変化に富むチョウの1種である。前翅長は21mm程度で、シジミチョウとしては大型である。

翅表面は黒縁、黒斑を有する青藍色から全面暗褐色のものまで変異が大きいチョウである。翅形や翅斑などの外見のみによる♂♀の鑑別は、難しく熟練を要するが、腹端および前脚の構造を調べれば容易に区別される。

【分布の概要】

【県内の分布】

分布は、局地的である。かつては、豊田市(旧藤岡町、旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町)、設楽町(旧設楽町)、新城市(旧作手村)などで記録されたが、近年は記録がないまま推移している。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布する。青森県や山梨県には、分布も広く産地も多いが、本県の近隣地域では、山間地帯に産地があるも、その多くは局所的である。最近、岐阜県東濃地区も個体数が激減し、保全のための基礎調査が実施されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部よりヨーロッパにわたってユーラシア大陸の北部まで分布が広がっている。

【生息地の環境 / 生態的特性】

日当たりの良い湿地状草地や山間部の日照を確保するために造られた草地が生息地であり、そこには幼虫の初期の食餌植物のワレモコウが自生し、後期の食餌となるクシケアリの仲間が生息する。

年1回の発生で、8月中～下旬頃が最盛期である。母チョウは、ワレモコウの花穂に産卵、幼虫はワレモコウの花に食い入り成長し、4齢になると地上に降りてクシケアリの仲間に巣の中に運ばれる。幼虫はアリの卵や幼虫を食べて成長する。幼虫で越冬する。旧藤岡町・旧小原村・旧旭町産は、岐阜県東濃地方の産地圏と同一のもので翅表は青色、旧稲武町・設楽町産は長野県下伊那産に近く青藍色、旧作手村産は孤立性で青白色とそれぞれが異なった色調を示す(高橋, 1984)。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1980年代前半までは、湿性草原に相当数生息していたが、その後激減し、1999年に旭町で数頭が確認されたのが公式記録(高橋ほか, 2001)の最後である。2001年までは確実に生息していた(高橋匡司、未発表)。その後、確認できないまま現在に至っている。湿性草原の遷移による草木の繁茂・管理放棄や機械による徹底した草刈りなど管理形態の変化による生息環境の悪化のために絶滅の危機に追いやられたものと思われる。一方、ワレモコウは復活し、農薬の過度な使用は減り、各種のチョウが生息しはじめるなど、外観的には生息できそうな環境に回復したように見えるが、本種の復活の兆しはない。

【保全上の留意点】

本種は、湿性草原や日当たりのよい草原環境に依存し、特異な生活様式を有している。近年は急激に個体数を減らしているため、まずは、食餌植物であるワレモコウの生育とクシケアリの仲間が生息できる環境の維持・回復が必要不可欠である。なお、過度の採集は避けたいものである。

【引用文献】

高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 126. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 26-27, 257. (財)旭高原自然活用村協会.

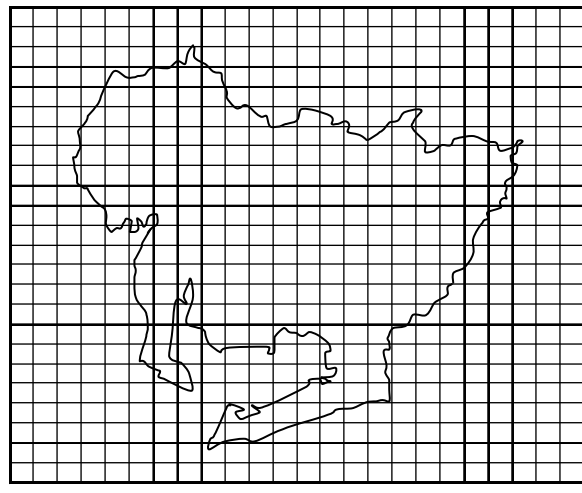
【関連文献】

白水 隆, 2006. ゴマシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 171. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.



豊田市(旧旭町), 2000年9月9日, 高橋匡司 撮影

県内分布図



ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus* (Butler)

【選定理由】

愛知県からの最初の記録は 1951 年、南設楽郡旧作手村（現新城市作手）である。同村には広大な湿原がかつて広がっており、黒瀬（善夫）、田原（長ノ山）、岩波、高里、鴨ヶ谷、清岳などに多産した。また、北設楽郡豊根村黒川（1969）、稲武町（現豊田市）黒田ダム（1968、1986）、御所貝津中根（1994）、月ヶ平（1968）、東加茂郡旭町（現豊田市）（1991）。西加茂郡小原村北（現豊田市小原北町）（1961、1964）、足助町香嵐溪（現豊田市岩神町）（1965）、などからも報告され、三河の山間部に限られた産地があった（高橋ほか、1991）。しかし、これらのほとんどの産地から最近の観察例がない。旧旭町では 1999 年が最後という。旧作手村では、2006 年の報告があるが、2007 年には発見されなかった。旧小原村、旧足助町では産地そのものが大きな変化を受け、生息は絶望視されている。

【形態】

前翅長約 1cm の小型のシジミチョウ。都市部に普通に見られるヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミに似るが、前・後翅ともに裏面外縁に沿って橙色紋が並んでいることから容易に区別できる。近似種のミヤマシジミやアサマシジミ（ともに愛知県未記録）とは、後翅裏面の橙色の斑点の外側の黒点内に輝く藍色の鱗粉がないことなどから区別できる。翅表は、♂では青藍色、外縁は黒く、♀では暗褐色、外縁近くに橙色の斑紋をもつ。愛知県産は、他産地産の個体に比べ、一般に、♂の翅表の翅脈が黒く、♀の翅表の橙色紋の発達が弱い。

【分布の概要】

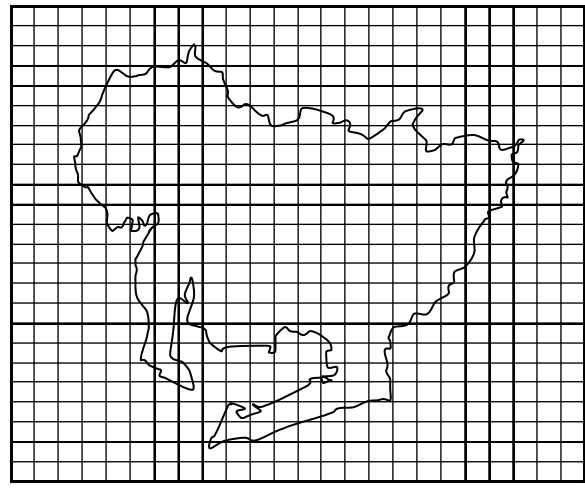
北海道では分布が広く、平地にも産する。東北から中部地方では山地性となり、山間の草地や路傍に生息する。近畿地方からは未知、中国地方では山間の湿地に産地が点在する。

愛知県では、現豊田市や新城市、北設楽郡豊根村など三河山間部にのみ見出された。この産地は、近隣の岐阜県東濃地方や、長野県下伊那地方の産地とともに、中部山地帯の産地とは隔絶され、湿地草原に産する特異な生息地であった。国外では、ユーラシア大陸の北部に広く分布し、ヨーロッパに達する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

愛知県の産地は、すべて明るい湿性草原で、北海道や多くの中部地方などのような乾性草原や路傍からは生息が知られない。成虫は発生地を離れることがなく、低く穏やかに飛び、各種の草花を訪れる。食草付近の草むらに潜り込み、地表に近い草の茎などに産卵する。卵で越冬し、翌春孵化。幼虫の食草はマアザミの葉で、アリが群がっていることが多い。蛹は、食草やその周辺の水草などから発見され、同時に数頭集まっていることがある。年 1 回 6 月から 7 月にかけて発生し、8 月にはほとんど姿を消す。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

昭和 47 年（1972）7 月 12～13 日に藤岡村、小原村、足助町に集中豪雨があり、これらの山間の湿地はほとんどが土砂で埋没した。一方、旧作手村では、ほとんどの湿原が水田化された。長ノ山湿原など 3 箇所のみが保存湿原とされているが、乾燥化が進み、かつての湿原の様相を留める範囲は著減した。さらに湿地周辺の水田には空中からの農薬散布が 2007 年にも行われており、かつてこの湿原に生息していた多くのチョウは 2007 年の調査時にはほとんど見られなかった。長ノ山以外の湿原は小規模であり、樹林化が進んでいる。

近隣の瑞浪市や中津川市など東濃地方、長野県下伊那郡の産地はすべて湿原であったため、埋め立てなどにより産地そのものが変貌し、本種も消滅した。

【保全上の留意点】

まず生息地である湿原の保存が優先されなければならない。農薬の使用に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

岐阜県瑞浪市や長野県下伊那郡根羽村赤坂峠などの近隣の生息地も干拓事業により一変し、本種は絶滅した。

【引用文献】

高橋 昭ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus* ssp.

【選定理由】

愛知県から岐阜県東濃地方、一部静岡県浜松市周辺、の丘陵には、シデコブシ、シラタマホシクサなどこの地方に特有の東海丘陵要素植物が自生する湿地・湿原があり（愛知県環境部自然環境課, 2007）、ここに限り発生するヒメヒカゲ、ヒメシジミが生息していた。このような発生地となる湿地・湿原はかつて名古屋市内の東山から八事など東部地区などから豊田市、岡崎市、豊橋市などに点在し、本種が多産したが、近年、これらの発生地ほとんどが人工物により消滅し、岡崎市、豊橋市、新城市の発生地を除いて絶滅した。

【形態】

前翅長 1.5~2.0cm、本州産ジャノメチョウ科の中ではヒメウラナミジャノメなどとともに小型。翅表には斑紋がなく、全体的に♀は暗褐色、♂は黒褐色に近い。裏面は橙褐色で、眼状紋が外縁に並び、♀では数が多く、大きい。♂の前翅裏面では、眼状紋はないか、1~2個で、小さく、外縁近くの銀色条を欠く。これらの点から、♀との区別は容易である。

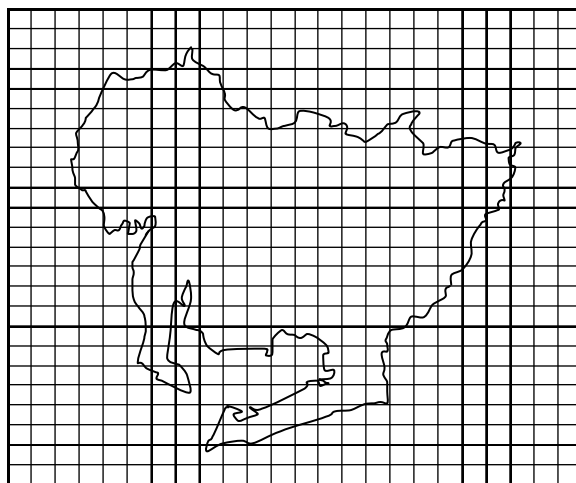
【分布の概要】

愛知県では、尾張地方（春日井市、名古屋市東北部、長久手町、日進市、瀬戸市）から西三河（豊田市、三好町、知立市北部）にかけて、岡崎市の一部、東三河（豊橋市、新城市）のほぼ 3 地区から記録がある。いずれも丘陵の窪地や山裾の明るい湿原で、ハッチョウトンボと共生している。尾張地方の産地は岐阜県東濃地方の産地とも連なる。長野県木曾地方には確実な産地がなく、塩尻や松本地方との間に分布空白地帯がある。東三河東南部の産地は、西遠地方（湖西町、浜松市、浜北市、袋井市）などにも及ぶ。

日本では本州特産。本州では、東北地方には分布しない。長野県から群馬県にかけての生息圏があり、この地域では乾燥した草原が主な発生地となり、東海地方の産地とは異なる。兵庫県から山口県にわたる近畿中国にも生息圏があり、東海地方と同じく湿地との結びつきが強い。三重県、京都府、大阪府からも古い採集記録があった。

国外では、朝鮮半島からユーラシア大陸に広く分布し、ヨーロッパに及ぶ。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

東海地方の産地はすべて、サギソウ、モウセンゴケや小型のスゲ科、イネ科の植物が生える明るい湿原である。作手村など一部の産地ではヒメシジミと共生している。また、産地にはウラナミジャノメが見られることが多い。年 1 回、5 月下旬から発生し始め、ほぼ 1 か月間見られる。成虫は産地を離れることがなく、湿地上を緩やかに飛び、低木や食草に止まることが多い。花や地表にとまる習性は乏しい。卵は食草自身に産附され、7 月に孵化、幼虫は小型で柔らかいイネ科やカヤツリグサ科の葉を食べ、成長は緩徐、中齢幼虫で越冬し、翌年 5 月頃食草に垂下して蛹となる（葛谷・高橋, 1952）。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋市、瀬戸市など尾張地方、西三河地方からの減少が著しく、2000 年に入ってから報告がほとんどない。岡崎市、新城市旧作手村などでは限られた湿地に保護されてほそぼそと生息している。2007 年の新城市旧作手村の調査では 2 箇所の湿原でのみ生息が確認された。近隣の瑞浪市や中津川市など東濃地方、長野県下伊那郡の産地はすべて湿原であったため、埋め立てなどにより産地そのものが変貌し、本種も消滅した。

絶滅のもっとも大きな要因は発生地である湿原の消滅である。名古屋市などでは住宅、学校、工場、ごみ処理場などに、瀬戸市などはゴルフ場になったところが多く、これに干拓が拍車を掛けた。風水害で湿地が泥土で埋まった産地もある。

【保全上の留意点】

本種の生態的特徴からみて、生息地の復元の可能性はほとんどない。現在の生息地の保全に最大の努力を払わなければならない。発生地周辺での農薬散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

愛知・岐阜東濃・西遠地域のヒメヒカゲは、他産地のものと隔絶されており、斑紋や色彩に差があり、これらの集団は分類学的にも貴重である。東海地方産は、長野県などと同様本州中部亜種 *annulifer* が使用されたり、本州西部亜種 *arothius* として扱われたりする。ここでは、亜種名を未決定とした。

【引用文献】

葛谷 健・高橋 昭, 1952. ヒメヒカゲの生活史. *New Entomologist* 2 (3/4): 43-50, pl.1-2.

愛知県環境部自然環境課, 2007. 湿地・湿原生態系保全の考え方—適切な保全活動の推進を目指して—: 1-50.

【関連文献】

福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑, (IV): 157-160. 保育社, 大阪.

ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、現存数は2であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

2008年には刈谷市で新産地が発見された。

【形態】

小型のイトトンボで、♂の翅胸前面に黄緑色の4個の点があることが特徴的である。



♂. 飛島村, 1984年7月8日, 清水典之 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張平野の河口域に近い3市町村と、三河湾に近い1市で記録されている(いずれも旧市町村単位)。

【国内の分布】

本州東北部から九州北部にかけて記録されている。

【世界の分布】

香港、台湾に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、河川下流域の、しみ出し水があり、常時水が数 cm 溜まったヨシ等の生える汽水湿地に生息する。未熟成虫は、同所的に見られる。幼虫は、浅い水域で水中の植物等につかまっている。

成虫は6月から7月にかけて多く見られ、8月には減少する。1年1化である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2007年までは愛西市(旧立田村)でのみ確認されていた。同地は木曾川の背割堤にある湿地で、生息範囲は狭く、個体数も少ない。2008年には刈谷市で新たな生息地が発見されたが、生息範囲は狭く、個体数も多くない。名古屋市と飛島村の産地は埋め立てにより消滅した。

本種はごく小規模な湿地でも生息できるので、他にもどこかに生き残っている可能性はある。ただし、仮に新産地が発見されたとしても、本種の生息地は埋め立てと隣り合わせにあり、それが本種絶滅の最大要因となっている。

【保全上の留意点】

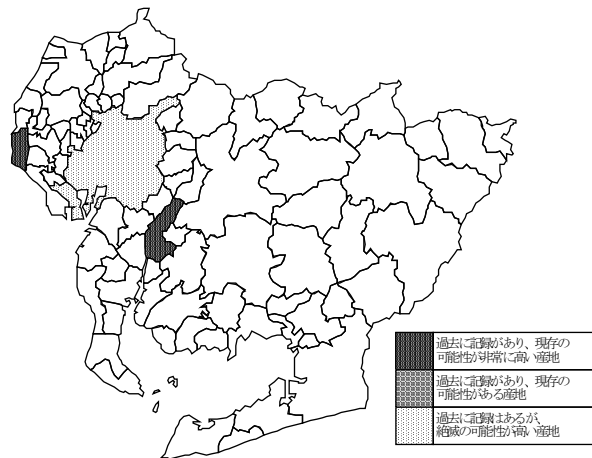
- 1) 生息地である湿地の確保
- 2) 周辺域の伏流も含めた水流の変更防止

【特記事項】

本種の産地には、より大型のアオモンイトトンボが共存し、本種が同種に捕食されるのがしばしば観察されるが、本種幼虫は塩分への抵抗性を強めることでアオモンイトトンボが侵入できない水域での生息を可能にしている。

本種の和名は茨城県の潤沼(ひぬま)で採集されたことに由来する。

県内分布図



ゲンバイトンボ *Platycnemis foliacea sasakii* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、現存数は4であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

前回のレッドリストでは絶滅危惧 II 類であったが、ほとんどの産地で個体数や生息域の減少が顕著なため、今回は絶滅危惧 I B 類に選定された。

【形態】

♂の中・後肢の脛節は顕著に扁平化し、白い軍配状となっているのが特徴的で、和名もその軍配状の肢に由来する。



♂. 犬山市池野押出, 2007年6月21日, 安藤 尚 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～西三河の丘陵地から低山地にかけての8市町村(旧市町村単位)で記録されている。東三河では新城市(旧作手村)の記録がある。

【国内の分布】

本州東北部から九州中部にかけて記録されている。

【世界の分布】

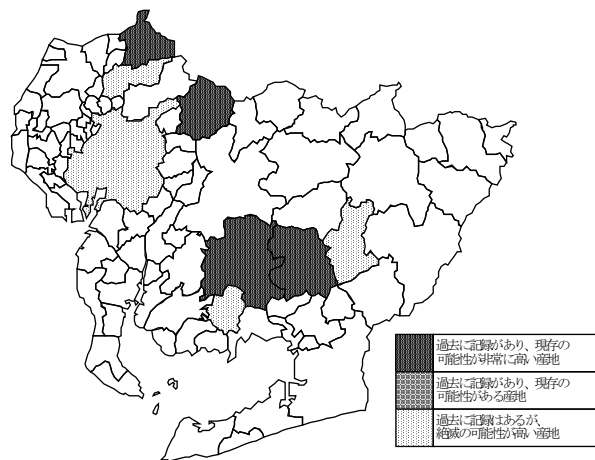
原名亜種が中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに河川中流域の清流や、その周辺の伏流水などにより年中水が枯れることがなく、岸辺に藻など沈水植物が豊富な緩流や池に見出される。未熟成虫は、ほとんど生息地を離れない。幼虫は、岸辺の沈水草や沈水藻類につかまっている。

5月末頃から羽化が観察され、成熟成虫は8月末頃まで見られる。1年1化と思われる。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

矢作川水系と木曾川水系に現存する。1990年代には矢作川支流の乙川水系の広範囲で確認でき、水田中の用水路でも見られるほどであったが、2000年代に入ると急激に個体数が減少した。東三河では新城市(旧作手村)で記録されているが、耕地整理と共に生息地は失われた。戦前には名古屋市内でも記録されていたようだが、市街地化とともに絶滅した。

本種幼虫は水質の悪化にかなり弱く、また産卵場所であり、幼虫の生息場所となる岸辺の植生が護岸工事等により失われると、即絶滅してしまう脆さを有している。近年は荒れた山によると考えられる大水が出ることも多く、本種の生息環境に大きなダメージを与えているようである。なお本種は保守的な性質で、新天地を求めて分散することはほとんどなく、発生地に固執することが多いので、一旦産地が失われた場合、再び環境が元に戻っても、本種が戻ってくる可能性は極めて低い。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域や幼虫の生息域となる岸辺の植生の確保
- 2) 河川の水質汚濁の防止

【関連文献】

安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(6). 佳香蝶, 58 (226): 25-30.

コサナエ *Trigomphus melampus* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、
現存数は1であり、絶滅危惧 I
B 類に相当する。



♂. 東栄町月坂甫, 2000年6月2日, 安藤 尚 撮影

【形態】

体色は黒地に黄色の条斑を持つ小型のサナエトンボである。同属他種とは翅胸前面に太いL字形斑のほか、その外側に細い前肩条と小さい黄色点があること、また♂では尾部付属器の背面に突起がないことで区別できる。

和名は小さなサナエという意味である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河山間部の2町(旧市町村単位)でのみ記録されている。

【国内の分布】

北海道から本州西部にかけて分布し、離島では佐渡島で記録されている。ただし四国からは未記録である。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、比較的古い池沼で見られる。未熟成虫は、ほとんど水域を離れないようである。幼虫は、それらの滞水域や細流の泥底に浅く潜っている。

成虫は5月中旬頃より羽化し、5月下旬から6月にかけて生殖行動を行なう。飼育や野外での観察から、成虫になるまで2年を要すると考えられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2008年に東栄町で現存するのを確認している。同町では当初林縁の薄暗い小さな池から幼虫が採集されたが、その後少し離れた比較的開放的な池沼から多くの個体が確認された。その開放的な池は、かつては複数存在したが、現在は1つの池のみとなっている。同池は改修がなされたが、現在も比較的多くの個体が生息している。設楽町では1989年に記録されたが、水底を攪乱して生息環境を悪化させるコイが放たれており、現存の可能性は低い。

【保全上の留意点】

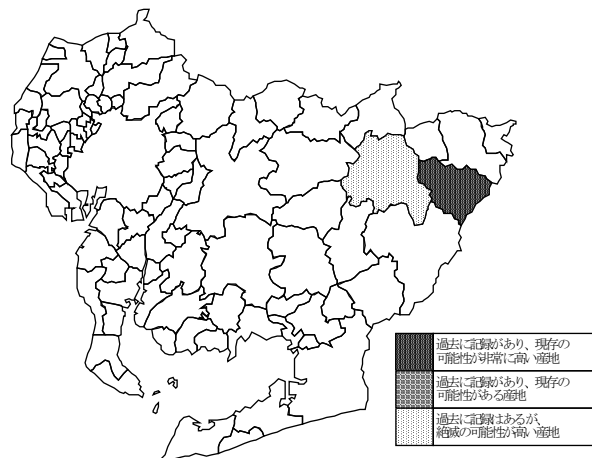
- 1) 発生地である池の保全
- 2) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚(コイも含む)の移入禁止

【特記事項】

本種は東日本には広く分布するが、西日本では日本海側を中心にやや限られた分布をする。愛知県はその分布の周縁部にあたるため、東三河山間部の限られた場所のみ見られる。

同属のオグマサナエやフタスジサナエが地史的に新しい地域にある水域に生息しているのに対し、本種は主に地史的に古い地域に生息しており、両者はマクロ的にはっきりと棲み分けている。このことから、本種は日本列島における先住者と考えられる。

県内分布図



エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は67%、
現存数は4であり、絶滅危惧 I
B 類に相当する。



♂. 豊田市深見町, 1999年11月6日, 鶴殿清文 撮影

【形態】

全身に鈍い金属光沢のある暗
緑色の中型のトンボである。同
属のハネビロエゾトンボとは腹
部第4節以降に黄色斑があるこ
とで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の丘陵地から山地にかけての
12市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

北海道から九州北部にかけて分布し、隠岐
等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

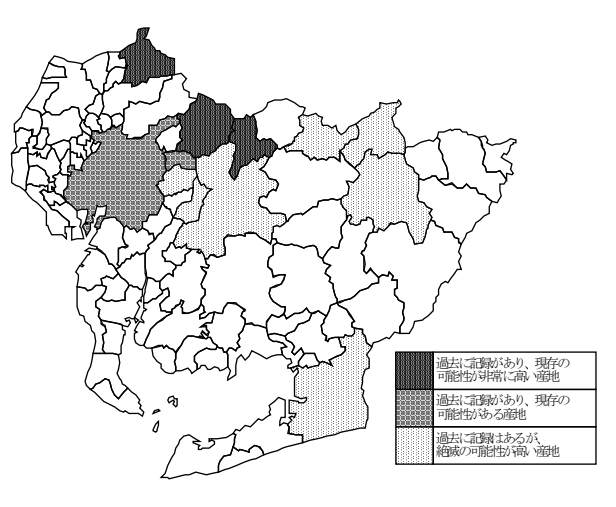
ロシアに分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地から山地にかけ
ての湿地で見られる。未熟成虫は、発生地か
らかなり離れるようで、林道や空き地、谷筋
の開けた空間等で摂食飛翔するのが見られる。
幼虫は、水中の植物等につかまっているか、
浅く泥の中に潜り込んでいる。典型的な向陽
湿地の住人である。

6月後半頃から羽化し、成熟成虫は8月を
中心に見られる。成虫になるまでに2年程度
を要すると思われる。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張では東部丘陵地の犬山市や瀬戸市等に現存している。西三河では豊田市(旧藤岡町)に現存しているが、山間部の豊田市(旧旭町)では1977年以降確認されていない。東三河では1950年代に豊橋市等で記録されているが、その後の追認記録はない。

本種が生息する湿地は、特に山間部では埋め立てられることは少ないが、実際には三河山間部では絶滅状態になってしまった。その要因としては、二次林の減少/消失による湿地の水位低下(乾燥化)や、砂防ダムの改修等による水位上昇で上流部の湿地が消失、といったことが推測される。また三河だけに限ったことではないが、1994年の渇水による湿地の干上がりは、多くの産地で幼虫の乾燥死、成虫の産卵場所の消失等を引き起こしたと思われ、湿地という微妙な環境に生息する種の存続の難しさを物語っている。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域である湿地及びその集水域を涵養する二次林の保全
- 2) 成虫が休息域である水域周辺の林地の確保

【特記事項】

全国的には見れば、特に東日本には広く分布し、西日本でも山地では比較的多く見られる場所があるが、愛知県では非常に分布の限られる種である。和名は主たる生息地である北海道に由来する。

キトンボ *Sympetrum croceolum croceolum* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は89%、現存数は3であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

前回のレッドリスト作成前後から急激に個体数を減らした種である。県内に残された安定的な産地はほぼ消滅したことから、今回新たに追加された。

【形態】

翅の前縁と根元から半分程度が美しい黄褐色となるアカトンボであり、和名はその翅の色に由来する。



♂. 豊田市飯野町, 1999年11月6日, 鶴殿清文 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～東三河の丘陵地を主たる分布域とし、27市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

北海道から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

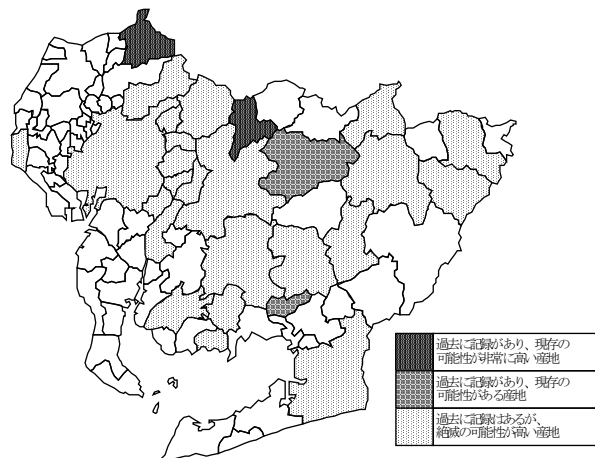
朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地から山地にかけての周辺を林に囲まれた池沼で見られる。未熟成虫は、周辺の林などへ移動するようであり、ほとんど姿を見かけない。幼虫は、水域の浅い岸辺で得られる。

7月頃から羽化し、10月頃に水域に戻ってくる。耐寒性のある種であり、他県では時に年越しをする例が観察されるほどである。1年1化である。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては尾張～三河の丘陵地から山間部にかけて、個体密度は高くはないものの点々と分布していたが、現在では豊田市(旧藤岡町)と犬山市の限られた池沼で少数が見られるに過ぎない。

生息地である池沼が改修されたり、水質悪化が進行したり、あるいは肉食の外来魚が放流されて絶滅した例が多いが、山間部の生息地では一見環境変化は無いように思われても、本種だけが姿を消す例も散見される。本種のみ絶滅する要因はよくわかっていない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫が休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

隣県でも本県と同様、近年生息地を急激に減らしているようである。

マダラナニワトンボ *Sympetrum maculatum* Oguma

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は83%、現存数は2であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

邦産アカネ属で最も絶滅が危惧される種であり、県内に残された安定的な産地も1ヶ所しかない。

【形態】

成熟しても体色が赤くならず、黒化する小型のアカトンボである。

和名は成熟しても腹部の斑紋が消失しないことと、大阪で発見されたことに由来する。



♂. 長久手町阿畑, 1989年9月29日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～西三河の丘陵地を主たる分布域とし、やや飛び離れた東三河の新城市(旧作手村)も含めると12市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から西部にかけて記録されている。

【世界の分布】

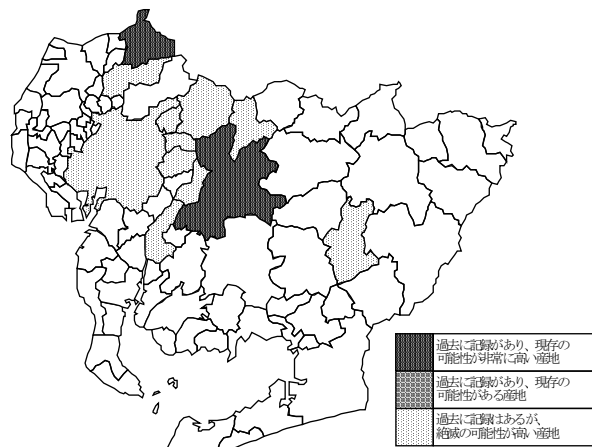
日本特産種である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は、おもに丘陵地の周辺をマツ林などに囲まれて日当たりが良く、遠浅でかつ岸周辺に背丈の低い水生植物の豊富な池沼で見られる。幼虫は、水域の浅い岸辺で得られる。

7月頃から羽化し、一旦水辺を離れるが、9月頃から成熟♂は水域に戻ってくる。1年1化である。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張では名古屋市東部丘陵地にも分布したが、現在では犬山市の池でのみ安定的に見られる。西三河では豊田市に現存するが、個体数が減少しており、種の存続が危ぶまれる。かつて多産した長久手町では確認できない。

幼虫は電気伝導度の低い「きれいな水」を好むことに加え、成虫はホシクサ類等背丈の低い植生のある遠浅部でしか産卵できないことから、護岸工事等による環境悪化が即座に絶滅につながる。また、かつて本種が見られた池沼群で環境悪化がないにもかかわらず、オオクチバスの放流された池のみ本種が見られなくなった例も報告されている。なお本種の分散力は他のアカトンボ類より小さく、1994年の渇水で失われたいくつかの産地では、現在でも本種の復活は見られない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫が休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

隣県の状況は、三重県では1ヶ所のみ現存、静岡県では浜松市における偶産的な1頭のみ、岐阜県では東濃地方に数ヶ所が現存しているに過ぎない。

タガメ *Lethocerus deyrolli* (Vuillefroy)

【選定理由】

かつては県内各地で生息していたが、近年その生息地が激減している。また、水質の悪化やマニアによる乱獲などで個体数が減っている。

【形態】

水生半翅類の中でも最大級で、体長は48～65mm。体色は灰褐色ないし褐色を呈している。前脚は強大な捕獲脚となっており、尾端に伸縮自在の呼吸管がある。口吻は短大で第2節は短い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川市、新城市、豊田市、西尾市、瀬戸市、尾張旭市、春日井市、犬山市などで記録されている。

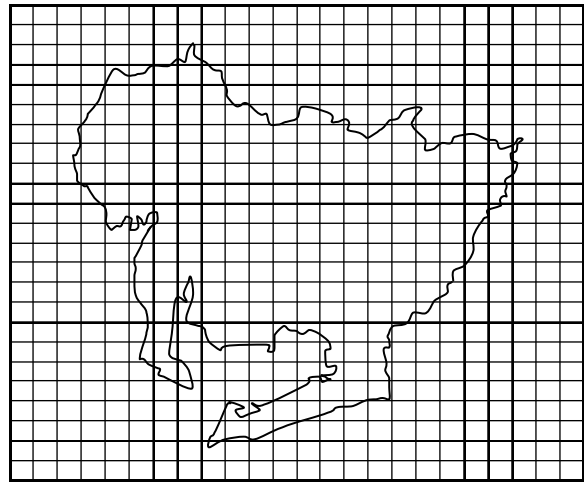
【国内の分布】

北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、琉球（沖縄島、石垣島、西表島、与那国島）。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州、サハリン）、中国、北朝鮮、韓国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地から低山地にかけて、抽水植物が繁茂する溜め池などに生息する。また、水田地帯の水路や休耕田の泥深い湿地環境でも確認されている。♀は水面上の植物の茎などに卵塊を産み付け、♂がこれを守る習性が知られている。灯火によく飛来する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

戦後の農薬大量使用により激減したが、近年では、若干ながら増加傾向にある。丘陵地から低山地の抽水植物が繁茂する溜め池などに生息するが、西三河地方では休耕田のような泥深い環境にも多数見られる場合がある（大塚，2008）。いわゆる人里昆虫であったことから、高度経済成長期以降の環境、人の生活様式の変化の影響を強く受けたと考えられる。具体的には水田への農薬使用等による生息地の水質悪化、溜め池の消失などが直接的な減少要因としてあげられる。ペットショップなどで販売されるようになってからは、マニアによる採集圧も無視できない。

【保全上の留意点】

現在の生息地については、大規模な土地の開発を行う際には、十分な配慮が必要である。また、本種はペットショップなどで高値で取引されることから、業者による採集圧の影響が心配される。反面、飼育が容易であることから、増えすぎた個体の放虫による遺伝子汚染や生息地の攪乱が懸念される。

【引用文献】

大塚 篤，2008. タガメの分布調査と飼育(Ⅱ). 佳香蝶, 60 (234): 127-131.

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司，1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
大塚 篤，2003. タガメの分布調査と飼育(Ⅰ). 佳香蝶, 55 (215): 61-64.

シロヘリハンミョウ *Cicindela yuasai yuasai* Nakane

【選定理由】

海浜の岩場などに生息するが、カワラハンミョウと同様に生息地は狭められ、県内での生息情報が途絶えている。

【形態】

中型のハンミョウで斑紋は上翅側縁の細い白帯のみ。メスは上翅中央上部に鏡状の光沢のある円紋を持つ。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市(旧渥美町)(神谷, 1956)伊良湖岬(浅岡, 1987)、篠島(神谷, 1956)。いずれも海浜の岩場やその周辺に生息する。

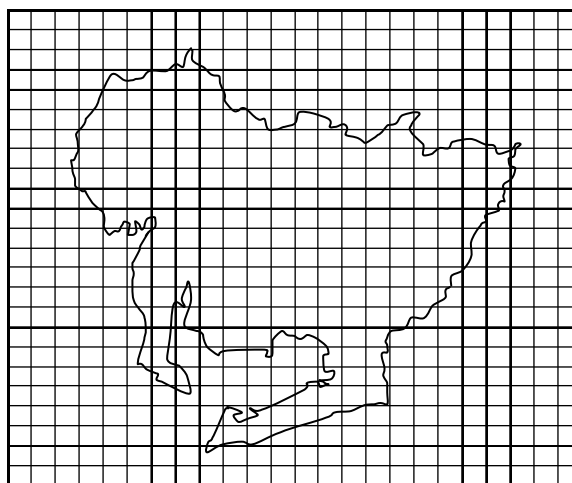
【国内の分布】

本州以南沖縄までの各地。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、海南島、ベトナム。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は海浜の岩場やその周辺に見られる。県内の記録は乏しく生態的な知見は少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては海岸部や島嶼に広く分布していたものと思われるが個体数が少なく記録に乏しい。上記 2 地域についてはその後も調査されてはいるが追加の記録はない。

【保全上の留意点】

県内の生息状況の詳しい調査が必要。海浜への車の乗り入れを慎むなど砂浜環境の保全対策が必要。

【引用文献】

- 浅岡孝知, 1987. シロヘリハンミョウ伊良湖岬に産す. 三河の昆虫, 34: 229.
神谷一男, 1956. 南知多・渥美・蒲郡地方に産する昆虫類. 三河湾自然公園調査報告書: 50-61.
大平仁夫, 1973. 採集されなくなった三河の甲虫 2 種. 三河の昆虫, 4: 15.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

コハンミョウモドキ *Elaphrus punctatus* Motschulsky

【選定理由】

生息地が河川敷や湿地など湿性環境の陸上部分であることから、護岸工事などの影響を受けやすく、従来の生息地もそれによって失われた。

【形態】

体長 6.5mm 内外。体は黒色で弱い銅光沢を帯びる。肢は赤褐色。上翅には 4 点刻列があり、各点刻は眼状紋となりその中心は暗青色を帯びる。眼状紋の間は縦長で滑らかで鐘状となる。胸部下面は粗点刻が密にある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、春日井市の 2 ヶ所の記録があるにすぎない。

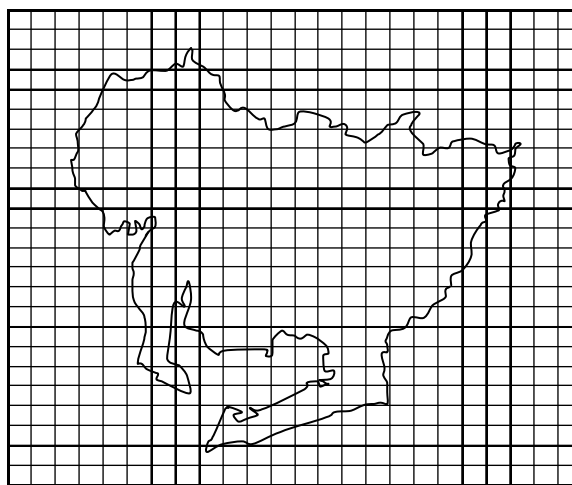
【国内の分布】

北海道、本州（中部以北）。

【世界の分布】

シベリア東部、中国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

河川敷や湿地などの湿った環境を好み、草間の地面に見られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

護岸工事などによって既知産地が失われてしまって以降の生息情報はない。

【保全上の留意点】

芦原などの湿性環境の保全が大切である。

ハバメクラチビゴミムシ *Trechiana habeii* (S.Uéno)

【選定理由】

洞窟性の種で、豊橋市東部の蛇穴ならびに新穴および周辺の石灰岩地帯にのみ分布する、著しく分布域が狭い種である。最も主要な生息地である蛇穴では、1980年代までは比較的容易に発見することができたが、1990年代後半からは発見が極めて困難になっており、洞窟内の環境も悪化している。加えてマニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっていることから、今回ランクが絶滅危惧 I B 類に引き上げられた。

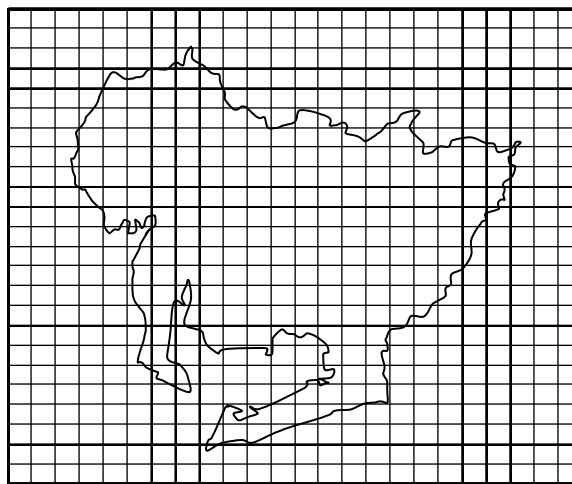
【形態】

体長 4.9~5.5mm。体色はアメ色で艶がある。複眼は退化し、わずかに痕跡が認められるのみ。前胸背は垂心臓形で後角毛がある。上翅は長卵型。*Trechiana* 属の種は互いに非常によく似た種が多く同定にはオス交尾器を精査する必要があるが、本地域に生息するのは本種のみである。

【分布の概要】

豊橋市の蛇穴および新穴の特産種。蛇穴、および新穴洞内以外でも周辺の地下浅層から採集されたという未確認の情報があり、また人が入洞不可能な洞窟深部や小さな洞窟にも生息している可能性があるため、実際には豊橋市東部から県境にかけての石灰岩地帯を分布域としていると思われるが詳細は不明。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

洞窟性の種で、洞窟内の地中、石や朽木の下などから発見される。洞窟というきわめて特殊な環境に著しく適応した種である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

主要な生息地であった蛇穴は、洞内が乾燥化している。さらに入洞者の無知、マナー悪化のため、洞内でたき火、発煙筒などを焚いた形跡がある。また一度に多人数が入洞してのイベントなども行なわれている。こうした行為による直接的な影響かどうかは不明ながら、この数年蛇穴での発見は極めて困難になっている。さらに、近年はマニアによる過剰採集や洞窟性昆虫の採集を目的としたトラップの放置などが脅威となっていると推測される。新穴については現在、入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため最近の生息状況は未調査である。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないことが第一である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について、検討する必要がある。

【特記事項】

本県にのみ生息する特産種であり、県内の生息地の消失は、種の絶滅に直結する。

【関連文献】

Uéno, S., 1984. Studies on the Japanese Trechiniinae (II). Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 21: 29-37.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ツツイキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus tsutsui* S.Uéno

【選定理由】

海浜性の種で、満潮時に海中に埋没する潮間帯を生息地とする。本県の生息地は現在知られる本州唯一の分布地となっているが、生息域は極めて狭く、また不安定であり、絶滅の危険性がきわめて高い。

【形態】

体長 3.5mm 内外。全身黒色でやや赤みを帯びる。頭部は大きく、大顎は発達するが、歯を欠く。前胸背前角はよく突出し、基部は強く収縮する。後翅は退化し、肩部は丸まる。

【分布の概要】

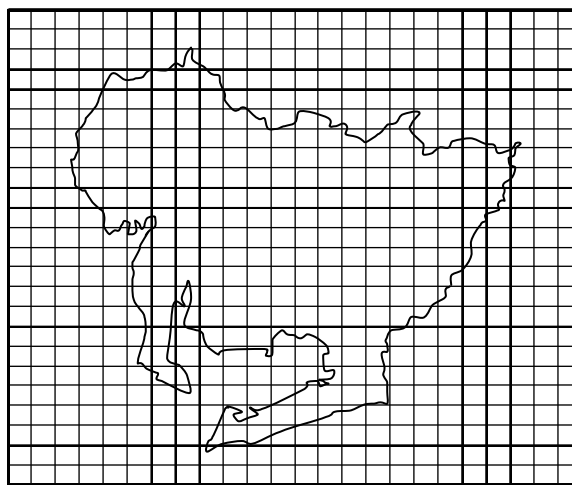
【県内の分布】

知多市新舞子、および豊川河口の 2 カ所のみしか知られていない。

【世界および国内の分布】

日本の特産種である。愛知県以外では、屋久島から奄美大島にかけて分布する。九州、四国では未発見。最近静岡県内からも発見された。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

豊川河口近くの潮間帯。生息地環境は護岸工事により敷き詰められた岩の上に花崗岩の主成分である石英、長石、雲母よりなる砂が堆積した場所である。本種は、水没する満潮時には岩の窪みや付着したカキなど貝類の隙間に身を潜め、干潮になり、露出した岩や砂が乾いてくるとその表面を徘徊し、餌をさがす。昼間も活動するが、夜間により活発である。なお、屋久島や奄美大島での生息地は珊瑚礁である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

新舞子海岸の生息地は 1965 年に発見されたが、その後の護岸工事のため絶滅した。豊川河口の生息地は 1994 年に確認された。生息地は地形的条件から幸運にもヘドロの堆積を免れたごく狭い地域に限られ、非常に危険な状態である。減少の要因としては、潮間帯の汚染と自然海岸の減少をあげることができる。しかしながら、本種の生息地は自然海岸ではなく、伊勢湾台風後に人工的に護岸された地域であることから、ヘドロなどの堆積による潮間帯の汚染による影響がより深刻であると考えられる。

【保全上の留意点】

生息地付近は、恒に護岸工事などが頻繁に行われる危険性にさらされている。数年前、生息地の約半分にあたる面積について護岸補強のための大規模な工事が行われたことがあるが、幸いにも工事後生息環境はほぼ元通りに復元され、工事後に本種の生息回復が確認された。このことから、配慮ある施策をとれば本種の生息地保全は可能である。しかしながら、本種の生息地となる河口部の環境維持には、上流部も含めた河川の浄化が必要である。

【特記事項】

現在の県内の生息地は 1 カ所のみ。

【関連文献】

森田誠司・白井勝巳・蟹江昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博研報, (6): 27-30.
佐藤正孝, 1965. 海に住む昆虫. 井波一雄編, 名古屋の自然: 166. 六月社, 大阪.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

キイロコガシラミズムシ *Haliphus eximius* Clark

【選定理由】

県内においては1960年には田原市(旧赤羽根町)から記録されており、平野部から丘陵地に生息したと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられ、近年の生息情報がない。

【形態】

体長3.2~3.5mm。体は黄褐色で、上翅に黒紋がないことが特徴である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年に田原市(旧赤羽根町)から記録されている外、情報がない。

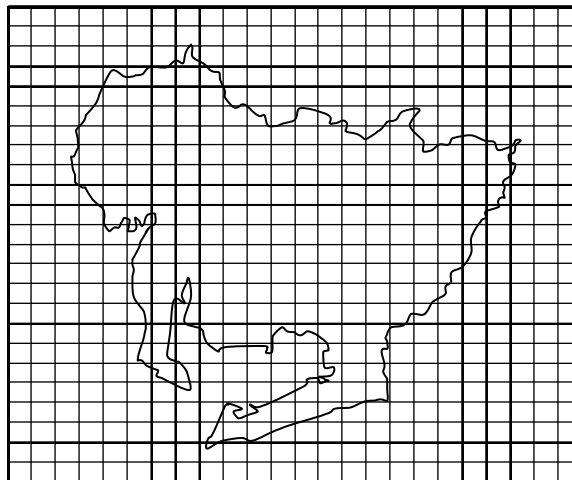
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

水草などの豊富な池沼に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。三重県でも近年の確認例がない。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニの影響による水域環境の悪化も影響があったかもしれない。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【特記事項】

古い記録は学名が *H. hiogoensis* Kano et Kamiya となっている。

【関連文献】

- 中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.
成瀬善一郎, 1960. 渥美半島赤羽産水棲甲虫. 佳香蝶, 12 (44): 152-153.
佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

マダラコガシラミズムシ *Haliplus sharpi* Wehncke

【選定理由】

県内においては1961年に安城市から記録されており、平野部から丘陵地に生息したと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられ、近年の生息情報がない。

【形態】

体長 3.3~3.8mm。上翅の黒紋は明瞭で、基部には常に横紋があり、側方の円紋および中央紋より斜め前方の紋が明瞭。

【分布の概要】

【県内の分布】

1961年に安城市から記録されている外、情報がない。

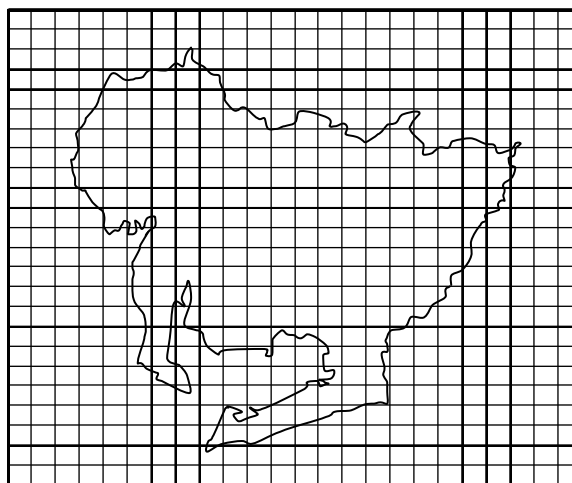
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の水草が繁茂する自然良好な池沼に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニの影響による水域環境の悪化も影響があったかもしれない。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い池や水辺環境をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【特記事項】

古い記録は学名が *H. tsukushiensis* Yoshimura となっている。

【関連文献】

- 中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.
神谷一男, 1961. 東海地方の珍しい昆虫. 名古屋鉄道刊
佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

ゲンゴロウ *Cybister japonicus* Sharp

【選定理由】

生息に必要な池の減少と、汚水や農薬の流入などによる池の環境悪化などが重なり、平野部からほとんど姿を消した。

【形態】

体長 34～42mm。体型は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた暗褐色で強い光沢がある。前胸背および上翅の側縁部は黄色。体下面は黄褐色で一部黒色。肢は黄～赤褐色。♀の背面は縮刻を密に装う。

【分布の概要】

【県内の分布】

かつては広く平野部に生息していたが、現在では三河山間部の一部に見られるのみである。

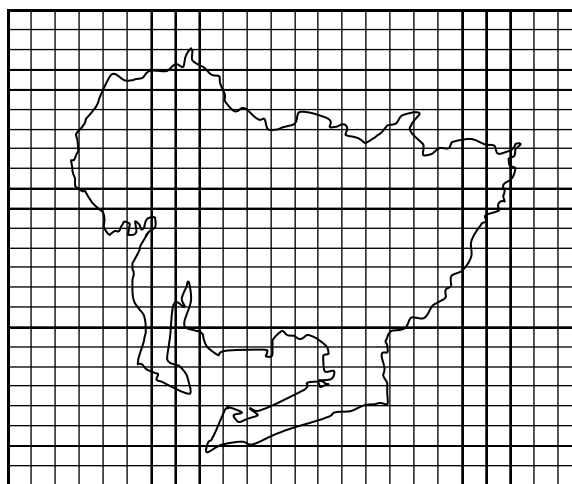
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、朝鮮半島、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ヒルムシロ、オモダカなど水生植物豊富な池沼に生息している。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

平野部の池沼の多くが埋め立てなどで失われ、生息域が著しく狭められた。現在では山間に残された池に細々と生き延びている。

【保全上の留意点】

止水池の護岸コンクリート化やゴムシート張りが増えてきているが、土のある良好な自然池の復活、棚田上部池の保全および水田の農薬散布に際しては十分な配慮が必要である。また、ペット業者などによる採集は厳に慎むべきである。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 207. 愛知県.
北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 157. 文一総合出版.

ツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius monticola* Nakane

【選定理由】

自然環境の良好な山地に分布する種で、県内からは設楽町および豊田市（旧稲武町）の 2 カ所しか生息地が知られておらず、個体密度が著しく低い。加えて森林の乾燥化や発生木の減少により近年では姿を見ることが困難となってきた。

【形態】

体長 11~14mm。黒色で強い光沢がある筒型のクワガタムシ。雄の大顎の形態により 3 亜種に分類されており、県内の個体群は、歯が中央付近から前方に向かって出現し、亜種ミヤマツヤハダクワガタ (subsp. *monticola*) に分類される。

【分布の概要】

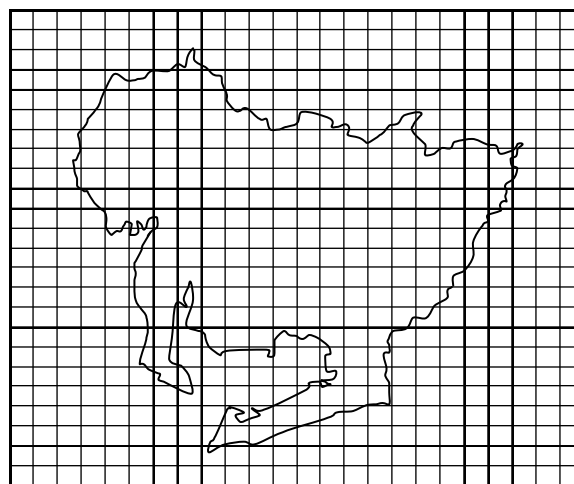
【県内の分布】

奥三河地域に分布。現在知られている生息地は豊田市（旧稲武町）（竹内・松野, 1984）と設楽町（竹内・松野, 1984）の 2 カ所のみ。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ブナ林に主に生息する。幼虫は、ブナ、ミズナラ、モミなどの比較的太い褐色不朽した朽ち木にみられる。秋に新成虫となり、そのまま越冬。6~8 月に野外に出現し、朽ち木上で発見される他、灯火にも飛来するが、成虫活動期の生態については、不明な点が多い。自然豊かな原生林に生息していることから、愛知県での分布は 2 カ所に限定されている。かつては広範に分布していたと思われるが、伐採植林による森林改変によって生息地が分断された。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での生息密度はかなり低いものと考えられる。幼虫の餌や成虫の重要な生息場所となる赤腐れをおこした朽ち木そのものの数も少ない。減少の要因としては、原生林の伐採に伴う生息環境の縮小が第一に上げられる。残された生息地も乾燥化が進み劣悪化している。また、近年のクワガタムシブームにより心ないマニアによる過度の採集圧、幼虫、成虫の住処となる朽ち木の破壊等も無視できない。豊田市稲武町の生息地では発生木の減少から個体数の減少が著しく、近年ほとんど生息が確認できていない。

【保全上の留意点】

原生林内の乾燥化を防ぐため、林内の歩道整備、林縁部の伐採などは極力慎むべきである。マニアによる過度の採集は厳に慎むべきである。

【引用文献】

竹内克豊・松野更一, 1984. ツヤハダクワガタ愛知県下での記録. 月刊むし, (166): 8.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ヒメオオクワガタ *Nipponodorcus montivagus montivagus* (Lewis)

【選定理由】

山地（ブナ帯）を中心に生息地する大型のクワガタムシで、近年全国的に個体数の減少が見られる。愛知県内では、非常に個体数が少なく、生息基盤が脆弱であるのに加え、近年のクワガタムシブームによりペット業者やマニアの採集圧にさらされている。

【形態】

体長 26～38mm。大型のオスでは大あごを加えると 50mm を越える個体もある。一見オオクワガタに似るが、脚が長く、前胸背板は前方で強く広がり、側縁は弧状となる。また、メスや小型のオスでも上翅にオオクワガタのような縦条は現れない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村（旧豊根村）（大平ほか, 1980）、設楽町（阿江, 1973；山崎, 1973）などから記録がある。奥三河地方のおよそ標高 800m 以上の山地に分布する。

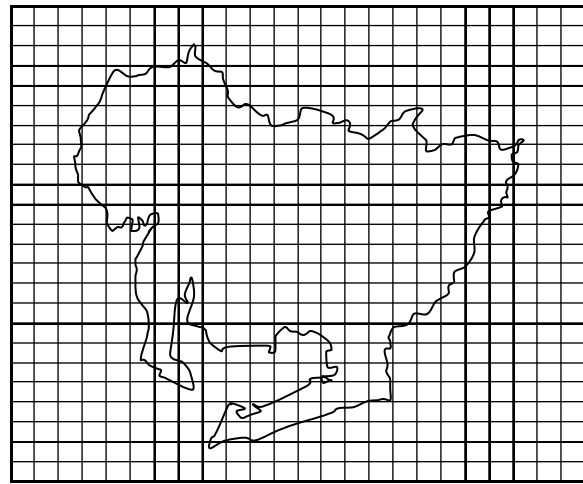
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ブナ帯を主な生息域とする。新成虫は秋に羽化し翌年の初夏に出現し、8月中旬から9月にかけて最も多く見られる。ヤナギ類の枝に集まり、樹液を吸う。幼虫は、ブナなどの大木の朽ち木にみられ、幼虫期間は2年ほど。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息密度は低く、発見は困難。愛知県は、本来本種の生息域であるブナ林の面積が狭く、もともとそれほど生息密度は高くなかったものと思われる。

減少の原因として、植林等による自然林の減少があげられる。また、近年のクワガタムシ人気の加熱による過度の採集圧、特に幼虫の捕獲を目的とした朽ち木の破壊が影響を与えているものと考えられる。

【保全上の留意点】

生息地であるブナ林の面積を減少させないことが必要である。幼虫が生育するブナの朽ち木には他にも多くの昆虫類が依存しているので、単に本種の保護のためだけでなく、ペット業者やマニアによる朽ち木の破壊は自粛すべきである。

【引用文献】

- 阿江 茂, 1973. 愛知県北設楽郡設楽町裏谷のヒメオオクワガタ. 佳香蝶, 25 (97): 101.
大平仁夫・松野更一・山崎隆弘, 1980. 愛知県豊根村の動物, 鞘翅目: 195-220.
山崎隆弘, 1973. 三河地方で採集した珍しい甲虫. 三河の昆虫, 3: 9-11.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.